

trpgダブルクロス：天開
司卓「Certification
of Hero」

夏目ヒビキ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

昨日と同じ今日、今日と同じ明日、このままの日々がずっと続くと思っていた。

だがー世界は突如変貌する。

シヨツピングモールを劈く爆音と悲鳴。

秘められた力と隠された真実。

キミは怪物か、英雄かー

ダブルクロス The 3rd edition

『Certificate of Hero』

ダブルクロス、それは裏切りを意味する言葉。

ー本配信、トレーラーより。

※天開司様の配信で行われたtrpg、ダブルクロス、通称ダブルクロスのリプレイのような何かです。ストーリーのみを追うのでPL側の色々が見たい方はリンクからアーカイブへどうぞ。

キャラ作成編↓<https://youtu.be/08kdXT-File>

セッション前編↓<https://youtu.be/nVOXj0UvyFE>

セッション後編↓<https://youtu.be/0e8CLsGqNpE>

参加者（敬称略） GM：天開司 PL：皆守ひいろ 白上フブキ 佐藤ホームズ

追記

テーマソングもどうぞ。

皆守ひいろ／ピースサイン↓<https://youtu.be/oXKnPHOg>

目次

はじめに／世界観・キャラクター説明	1	シーン6―1 「敵との対峙」	62
オープニングフェイズ		シーン6―2 「人を超えた力」	72
シーン1 「蒼羽 朱」	8	シーン6―3 「蒼炎」	80
シーン2 「霧谷コミヤ」	14	ミドルフェイズ	
シーン3 「神宮寺シユン」	22	シーン7 「歪み」	98
ミドルフェイズ		シーン8 「作戦準備」	105
シーン4 「見知らぬ、天井」	27	クライマックスフェイズ	
シーン5―1 「日常」	40	シーン9―1 「白衣の悪」	116
シーン5―2 「迫る暗雲」	48	シーン9―2 「uncontrol able」	127
ミドルバトル		シーン9―3 「絆」	139
		シーン9―4 「certificat	

i
o
n

o
f

h
e
r
o
|

147

はじめに／世界観・キャラクター説明

【最初に】

この小説は天開司卓で行われたダブルクロス配信のリプレイのような何かです。一般的なリプレイとは違い中の人のダイスやシステム処理は全て省き、ストーリーのみを追ったものになります。配信全体の内容を追いたい方はリンクから飛んで下さい。

【用語説明】

・レネゲイドウイルス

これに感染すると、オーヴァードとして覚醒する。なお感染した人間を徐々に蝕んでいき、最終的にはジャーム化させる。

・オーヴァード

レネゲイドウイルスに感染した異能力者達の総称。シンドロームと呼ばれる13種の能力が発現するとされており、どの能力を手に入れられるかはわからない。なお、何

種類の能力が発現するかも不確定であり、最多で3つの能力を発現したことが確認されている。能力の数が増えれば増えるほど、個々の純度が低くなり、使える力も弱くなるため能力が多ければ強いわけではない。なお、力を使い過ぎて侵食率が100%を超えるとジャーム化する。

・ジャーム

力を使い過ぎたオーヴァードの成れの果て。理性が無くなり、己の欲望のままに力を振るうようになる。FH側の人間に多い。

・UGN

オーヴァードの存在を秘匿し、世界の秩序を守ろうとする組織。FHに対立し、テロ等を防いでいる。一概に正義の味方とは言えないようだが――

・FH（ファルスハーツ）

オーヴァードこそが世界の上位者であるべきだと考える過激派集団。世界各地でテロを起こしている。目的を阻害してくるUGNとは対立している。

【登場人物説明】

PC① 蒼羽 朱 コードネーム：緋色（中の人→皆守ひいろ）

シンドローム：ピュアサラマンダー

〔戦法〕

炎と氷を操り、攻撃役を務める。基本は氷の回廊を作って敵に近づくと創り出した氷の剣でぶん殴るといっただけのシンプルな戦法だが、その火力は侮り難い。まだ力のコントロールが未熟なため、常に周りに危害を加えないよう気を配っている。

〔人物背景〕

ごく普通の一般的な高校生。だが、一つ悲しい過去を持っており、小学校低学年の頃に母親がDVを受けている姿を見てしまっている。そのことから、無力な自分を悔いるようになり、いずれ母親を守りたい、そう考えるようになる。そしてその対象は周囲の人間全員へと発展し、徐々に正義感を持つていった。

現在は両親は離婚しており、父親のもとで暮らしている。

PC② 素体ナンバー0538（霧谷コミヤ）
コードネーム：銀狐フオクシ（中の人→白上フブキ）

シンドローム：キュマイラ×ハヌマーン

〔戦法〕

青葉と同じく近接攻撃職で、キュマイラの方で妖狐に変身して戦う。なお、口には刃を加えており、それを利用して攻撃する。

〔人物背景〕

幼少期からUGNの施設で育てられたUGNチルドレン。元はFHから連れてこられた赤ん坊で、そこからUGNチルドレンとして教育を受けている。とある実験中にキュマイラ的能力で妖狐に変身してしまい、UGNの職員を一名重体に追いやった過去を抱えている。元FH側の人間ということもあり、UGN内部でも彼女を嫌うものもいる中、親身に接してくれた霧谷雄吾に名前をもらい、コミヤという名前を手に入れる。その後日本支部に派遣され、霧谷という性ももらう。彼女自身は任務をこなしながらも、全く不明の両親のことも追っているようだ。物語開始時点では蒼羽朱と同じ学校に潜入しており、付近に出没しているという『ディアボロス』の行方を追っている。

PC③ 神宮寺シュン コードネーム：探求者^{マククロスコレ}（中の人ー佐藤ホームズ）

シンドローム：ノイマン×バロール

〔戦法〕

前衛職の二人をカバ―する形で動く。バロールによるバフ・デバフを使い分け、後衛として援護に努める。戦闘時には魔眼を周囲に展開して、偵察、妨害を行う。なお、情報収集も担当する。

〔人物背景〕

UGN支部長。9歳。……9歳。年ごろの子供らしく少し生意気な性格だが、支部長としての仕事はしっかりこなそうと努力している。ノイマンのシンドロームのおかげか、能力的には問題ないようだ。しかし子供である事をコンプレックスに感じ、早く大人になりたいと思っている。毎日牛乳をたくさんのだり、ココアシガレットを啜っていたりもする。

なぜ、彼が9歳という年齢にして一端の支部長を担っているのかというと、これは彼の出自に関係する。彼の父親は超優秀なUGNエージェントであり、シユンの支部長という立場の前任者も父だった。そんな父に幼いシユン自身も憧れており、早く父のような一流のエージェントになりたいと思っていた。だが、そんな憧れが災いし、シユンは父が任務で向かったFHの研究所に忍びこんでしまう。

ーもつと近くで父の姿を見たい。もつと鮮明に焼き付けたい。そう思うあまり、幼いシユンは周りのことが見えていなかった。気がつけば圧倒的に強い筈の父が、FHのエージェントに苦戦を強いられていたのである。そしてそんなFHのエージェントが

目をつけたのが、呆然と立ち尽くす無力なシュンだった。強き父の唯一の弱点である「子供」を狙われたシュンの父は、シュンを庇いながらなんとか帰還したものの、意識不明の重体に追い込まれてしまう。そして未だ目を覚まさない父の代わりを探す中で、彼の父の肉親かつオーヴァードであるシュンに白羽の矢が立ったのだった。己のした行動への後悔と任された職務の重圧に苛まれながら、シュンは支部長として仕事をする。

N P C 森藤 涯

蒼羽アヤの男友達。ヒロイン。

N P C 春日恭二 コードネーム：ディアボロス

シンドローム ???

コミヤが追っているというディアボロス。FHのエージェントらしいが、果たして……

N P C 霧谷雄吾

U G N 日本支部長。超有能。秒単位でスケジュールが決まっている。コミヤに名前

をつけたのも彼。

N P C
???

今回の件の首謀者と考えられる謎の人物。素性は謎に包まれている。

オープニングフェイズ

シーン1 「蒼羽 朱」

休日のショッピングモール。中は喧騒に包まれており、多種多様な人々が歩いている。家族連れ、カップル、友人、若干柄の悪い集団。様々な人がいるが、すべからくして同じ事、それは確かに幸せな日常を過ごしているということだ。

「いらつしやいませー!!」

「何だよコレなんでこんな高えんだよゴルア?!」

「すみませんお客様。そちらはそのお値段からお下げすることはできないんですよお」

「んだオラア?……あー。まあええわ。買うわ」

「ありがとうございます。こちら19万8000円でございます」

「んー高つかいなあやっぱ?!」

ー本当に、多種多様である。

そんな多様性の中に、飛び込もうとする二人組。蒼羽朱と、森藤涯である。二人は幼

馴染で昔からよく遊んだりもしており、結構な仲良しだ。だが、恋人ではないしお互いそのつもりは無いはずなので、今回の外出もあくまで友人として、だった。

「いやあー!!今日は付き合ってくれてありがとう!!」

「……」

そう快活に笑う朱に対して森藤の顔はあまり明るくなかったが、朱の方はあまり気にしていないようだ。

「寝てるってこ叩き起こしちゃってごめんね!一人は寂しかったからさ、一緒に行きたかったんだよ!!」

「……まあ、あそこまで枕元で叫ばれたらなあ。行くしかねえよ。寝れねえし」

未だ半開きの目をこする森藤。こうやって無理やり引きづり回されるのも慣れたものなので、別に何とも思わなかったが。

「ごめんって!!そんなことより遊ば遊ば!!別に何かしたい訳じゃないけど……ご飯食べる?買い物する??森藤はどうしたい??」

「……今すぐベッドに戻りたい」

「だあーめだつて!!せつかく来たんだから一緒に遊ぼうよ!!ほらほらこつち来て!!

あ、ぬいぐるみだ!!かわいいーい!!!」

「んなあああああ」

森藤の脱力しきった声は当然、朱には届かなかつた。

◇

「どうする？次どこ行く??？」

手に抱えたぬいぐるみをさすりながら、嬉しそうに頷く朱。

「ああ、そろそろゲーセンにでも行くか？」

彼女に振り回されてもうすでに2時間ほど経つのだが、森藤自身もそれなりに楽しんでるようで、悪態も最初ほどはつかなくなっていた。

「いいねえ！待ってました!!今度こそ前回のリベンジをー」

「はいはい。また小銭貸せとかやめてくれよ？」

「うん。頑張る！」

「頑張るって……お前なあ……」

「さあさあ行こ行こ!!時間は有限だー!!!」

そう行つて先に歩きだす朱を、後から追う森藤。人混みを掻き分けながら、彼女についていく。

(まったく、しょうがねえやつだな……)

ふと周りを見渡せば、喧騒に満ち、笑顔が溢れている。かけがえのない日常。何気ない日常。こんな日々がいつまでも、いつまでも続けば、続くなら。

——そんな願いを抱くのは、彼らの過去を鑑みれば当然なのだろう。だが、彼ら運命を司る神は、それを許してはくれなかった。

——突如、爆音が響く。

何が起こったのか？ そんなことを考える暇もない。程なくして楽しいな雰囲気は一変した。絶叫と轟音が場を支配する。悲鳴と共に炎があちらこちらから上がる。

何秒気を失っていただろうか。朱は伝わる熱波に怯みながらも、必死で目を開ける。その瞳に映ったのは、爆破炎上するブティックストアと、その場に先ほどまできらびやかに展示されていた化学繊維が炎上する姿。そして、ようやく状況を飲みこむ。すると——

「ツ——」

身体のおちこちが痛い。気がつけば全身から血が出ている。視界も真っ赤に染まっていた。

「ああ!!痛い!!!痛い!!!」

全身を焦がすような痛みと熱に、苦しみ、悶える朱。だが、そんな場面でも彼女は友人のことを忘れなかった。

(……そういえば、森藤は——)

思う通りに動かない身体を引きずりながら、辺りを見渡す。すると、そこには頭から血を流して倒れ込んでいる森藤の姿があった。

「森藤?! 森藤?!」

呼びかけても返事がない。まさか、まさか、まさか——

(こ、こんな時はどうすれば——まず血を止めないと。でもやり方が——)

そんなことを考える間も無く、続いてあちらこちらのショーウィンドウから轟炎と爆音が上がる。先ほど以上に激しくなる瓦礫の束と炎。意識が朦朧とする。視界が、だんだんと覚束なくなる。

(私は、また何もできないのか? あの時みたいにな、また? そんなの嫌だ。今度こそ、私は——)

彼女の強い願いと反対に、視界は段々と薄暗くなっていく。迫り来るセカイと、逃れ

られない死。そして、淵に立ち尽くしていた意識でさえもついに――

――黒く、昏い奈落へと落ちていった。

シーン2 「霧谷コミヤ」

UGNチルドレン、霧谷コミヤ。彼女はオーヴァードと呼ばれる異能力者であり、UGNというオーヴァードが集まった組織に属している。今の彼女の目的は、敵組織である、FHのエージェント『ディアボロス』を追うことだ。彼は最近ここ近辺でいくつもの爆破事件をおこしており、UGN側からもかなり問題視されている。しかし、そう易々とは見つからず、手をこまねいているのであった。

(チツ。どこに行った……？先ほど見かけたあの影はー)

そんな思考は、一瞬にして遮られることとなる。代わりに辺りを支配するのは、大気を揺るがす轟音。何事かと思つて空を見上げると、付近にある巨大な建物ー確かシヨップिंगモールだったかーから煙が上がっている。今の音の原因はそれで間違いないさそうだ。

続いてさらに爆発音。内部は恐らく大惨事になっていよう。よくよく建物の出入り口を見てみれば、悲鳴をあげる人々の波が押し寄せていた。運良く逃げさせた者た

ちなのだろう。

(ーこの手口、間違いない。ディアボロスか)

コミヤは跳躍し、常人離れたスピードでショツピングモール二階の割れた窓ガラスから侵入する。

彼女のこの以上な身体能力も、全てオーヴァードの異能力によるもの。一度力を使えば相応の代償を得るのだが、そんなことは気にしていられなかった。

燃え盛るショーウィンドウ、灼け爛れ落ちそうになる梁。まさしく地獄絵図というのに相応しいのが中の状況で、あちらこちらに燃え盛るヒトのようなものでさえ転がっていた。

「チツ」

胸糞悪い風景に舌打ちすると、コミヤは少しでも生きている者がいないか探すため跳躍する。

しばらく探し回ると、瓦礫に囲まれて気絶している男女二人組を発見した。

即座に近寄り、意識があるかどうかを確認する。

「おい、大丈夫か？」

「……ッ!!」

コミヤが声をかけると、女性の方が目を覚ました。少しは苦痛に呻くかとも思ったのだが、なぜかそんな様子は見られない。それどころか今の状況を不思議そうに眺めているようだ。

「おいお前、ケガはないのか？何か身体で痛むところはー」

その瞬間だった。コミヤが声を掛けた女性は、急に呻き、苦しみだす。やはりケガの痛みが気の緩みとともにハッキリとしてきたのだろうか？いや、そんな感じではない。むしろこれは力が洪水のように溢れ出るようなー

「ウアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

女性は、耳をつんぎくような絶叫をあげた。彼女の身体から溢れる力を抑えきれないようだ。

あきらかな危険を察知したコミヤは飛びのいた。瞬間、女の周囲を囲んでいた瓦礫が吹き飛んだ。黒煙があがり、視界が一瞬閉ざされる。強靱な精神力で目を開いたコミヤの瞳に映ったものは――

――先ほどの弱々しい面影などどこにもない、炎熱を纏うヒトの姿だった。

周囲のものを瓦礫ともども吹き飛ばし、暴虐の限りを尽くす。ある程度満足したのか、単に視界に映っただけなのか――ようやくコミヤに反応すると、顔を向けてきた。

「おい、テメエは誰なんだ？」

凶暴な眼差しでこちらを見据えてくるその女を、コミヤも睨み返す。そして、言葉を返さず――

一閃。

だが、その直後にコミヤの顔は驚愕に歪むことになる。UGN内でもかなり上位に入るはずの最速の一閃が、女の手によって――正確には、そこから溢れ出る炎によって――受け止められたのだ。

「おいおい活きがいい奴だなあ？もつとかかってこいよ!!」

そういうと女はコミヤの刀ごと彼女を吹き飛ばした。だが、コミヤも簡単にやられるタマではない。即座に飛びのき、片足で難なく着地する。

さぞ愉快そうに破壊衝動に身を任せ、あちらこちらに無差別に攻撃し高笑いをする姿には、狂気すら感じた。

「アーツハツハツハツハツ!!」

「チツ。めんどくさい女が出てきたもんだー」

悪態を吐くコミヤ。だが、女は間髪入れずに炎の連撃を繰り出してくる。

(流石に抑えきれん。援軍を呼ぶか？あのガキは若干不愉快だがー仕方ない)

コミヤは攻めから逃げの姿勢へと転じた。背後を度々振り返りつつも、縦横無尽に飛び回る。それでもなお追い続ける女に、少しの恐怖すら感じながらも、内ポケットにしまつてあつた旧式の携帯を取り出した。

「おい！神宮寺!!」

「はいもしもし。こちら支部長」

携帯の向こうから幼い小学生のようなーというか実際に小学生なのだがーの声

がした。

「ガキイ!!こつちに今すぐ支援を寄越してこい!!」

「ん?なんだコミヤか?全く、いつも支部長に話すときは敬語を使えとー」

「分かったからつべこべ言わず早く寄越せガキ!!シヨツピングモールで女が暴れてる!!いいから早くなんとかしろ!!」

「あーはいはい。電話越しでも音聞いたらわかるよ。大丈夫、もう向かつてる」

怪訝そうに話す電話の向こうの声だったが、仕事はきちんとするはずなのでとりあえずは大丈夫だろう、だが、肝心の女がー

「なあ、足の一本くらい切つてもいいよな?!

「いや、それはダメだ。だが急ぐ。待つてろ。10秒で着く」

その声を聞いた瞬間、コミヤは携帯を投げ捨てる。今電話を掛けた支部長は空間転移ができるからたいして時間はかからないと思うが、肝心の男女二人組の男の方がヤバイ。

(どう止める?どう食い止める?もはや事態は一刻をー)

途端に、背後に悪寒。

「お嬢ちゃん?ねえねえアタシと遊ぼうよお?ねえ、なんで電話なんかしてるんだ?」

「いいか、お前みたいなのと遊んでる暇はー無いだよ!!」

振り向きざまに一閃。だが、軽く回避されてしまう。得意げな顔をする女に腹を立てながら、もう一撃。今度は峰打ちだ。倒せなくても、気絶程度ならー

ーだが、それもあえなく避けられる。

「あれえ? 何にも痛くないよお?」

「チツ。めんどくさい女だー」

「足りないんだよ。まだ足りないんだって!!」

狂気の瞳でこちらに問いかける。もうその顔には、理性の残滓すらも残っていないかった。

(……ここは一旦離脱をー)

もはや暴走する女を止められないと悟ったコミヤは、倒れていた男女二人組の男の方を抱えて、ガラスを破って飛び出した。

だが、女も黙ってはいなかった。つんぎくような笑い声を上げながら、外まで追ってくる。

それでもコミヤは逃げ続ける。生き延びる算段は一つだけだったが、今はそれに賭け

ることにした。

(まだ、こんなところではー)

市街地のアスファルトには、灼け爛れたような痕跡が作り続けられている。

シーン3 「神宮寺シユン」

昼下がりのUGN支部。ブラインダーから覗く日差しと、デスクの上のマグカップ。よくよく見れば中に入っているのはコーヒーではなくオレンジジュースだった。さらに黒基調のエレガントな会議室には不似合いな小さいコートやカバンがかけてある。

そしてその違和感の元凶こそ、これまた不似合いな程大きい椅子に座っている少年。神宮寺シユンであった。まだ地面にすら届かない足をぶらぶらさせ、ココアシガレットを加えている。何を隠そう、彼は小学三年生なのだ。

ではなぜ彼がこんな場所に居るのか。理由は簡単だ。彼は小学生でありながら、ここら一帯を管轄するUGN支部の支部長で、マイクロスコプ探検者というコードネームを持っているからだ。オーヴァードである彼は、ノイマンと呼ばれる超人的な高い知力を得ることができるシンドロームを有していた。だからこそ、小学生の身でありながら支部長が務められるのだ。

彼は今、上司である霧谷雄吾から呼び出しを受けていた。やけにハイテクなスクリーンが明滅する。すると、妙齢の青年の顔がスクリーンいっぱいに映った。

「時間通り、ですね。 マイクروسコープ 探査者」

「えー？ 当たり前でしょそんなの。 逆に時間守らないヤツとかいんの？」

「んー……君くらいの年だと、中々それが普通だとは思いますが」

「あつたりまえじゃん!! 僕は支部長なんだよ?」

「あーいや、そうでしたね。 失礼失礼」

霧谷は苦笑した。 だが、シュンが生意気な態度をとるのも、彼なりの大人びた努力の一面なのだ。 霧谷自身もシュンが自分の支部長という立場における責任を感じているのも知っていた。 だからこそ、彼の生意気な態度はあげつらわず、あくまでも大人として接する。

「ーでは、少し火急の用件なので、手短かにさせて頂きます。 このN市郊外のショツピングモールで、最近頻繁している爆破事件が起きました。 そちらの方で、あなたの部下 フオクシー である、銀狐が近くにいたので対応に当たってくれています」

「んー。 コミヤの事だし、別に問題無いんじゃないの?」

「――まあ、普通の案件なら良かったのですが……どうやら、覚醒者が出たようです」
「……ほう」

覚醒者。そのワードを聞いた時、シユンの顔色が変わった。声色も先程のどこか腑抜けた感じから、低く落ち着いた声になっている。

「覚醒者が出た際の通例通り、先ずは支部長である貴方に保護に向かって頂きたい」

「――覚醒、か。まあわかったよ。支部長の仕事はきっちりやるさ。まかせといてよ」

「ありがとうございます」

霧谷は瞠目すると、もう一つの話題を切り出した。

「――ところで、最近ここ近辺に姿を現している『ディアボロス』ですが、どうやらこの件にも一つ噛んでいるようです」

「『ディアボロス』……？また出て来たのか。何度も倒しても倒しても蘇ってくるし、逆に脅威に感じてきたよね」

「――まさに『不屈』ですね」

シュンは一度俯くと、神妙な顔で思案を巡らせた。彼なりに思うところでもあるのだろうか。

「ーあともう一つ。どうやら『ディアボロス』の他に別のFHエージェントの関係が確認されているようです。ですが、こちらについてはまだ掴みきれいていません。そちらの方でも調査をお願いします」

「りよーかい」

「手間をかけますが、どうかお願い致します」

「いやいや、任せといてよ」

シュンは少し顔を綻ばせる。まだ子供である彼にとって、大人から全幅の信頼を得られるというのは非常に嬉しいのだ。

「ー頼りにしていますよ。マイクロスコープ 探究者」

その一言とともに、スクリーンの灯りが消えた。机の上のマグカップの中身をがぶ飲みする。

ーさあ、これから仕事だー

そう思つて壁にかけたコートを取ろうとした時、着信が。

携帯の画面に映し出された名前は、『銀狐』。さて、訃報が吉報か、それともさらなる事件の前触れか。外見にそぐわぬ頭脳で静かに考える。

——そして、シユンは受信のボタンを押すと、そつと耳に携帯を添えた。

ミドルフェイズ

シーン4 「見知らぬ、天井」

「ハア……ハア……しつこい……女だ……」

閑静な住宅街。そして、そこにすぐわぬ少女二人。かたや煤まみれで息を切らし、かたやアスファルトの跡の先で気を失っている。夕方ではあつたが、幸い人通りは無く、彼女らの姿を見て騒ぎ立てる者は居なかつた。

そんな状況で、先ほどまで彼女と死闘を繰り広げていたコミヤは、ようやく安堵する。幕切れはほんの一瞬だつた。逃げ回るコミヤに対し、なお追い縋る炎を纏つた女。だが、常時熱波を放っている状態に彼女自身も耐えきれなかつたのだらう。赤々と燃え盛る炎がだんだんと弱くなつていったかと思うと、ついに道端で倒れ伏したのだ。もちろんコミヤにも余裕などあるはずもなかつたので、まさに紙一重、という状況ではあつたが。

(さて、どうしたものかー)

神宮寺には連絡してあるが、おそらく彼も現場の事後処理でんやわんやだらう。本来ならば待機してもう一度連絡の一つでもした方がいいだろうが、残念ながらあまり

ゆつくりしている場合ではなさそうだ。

(「ーまあ、通例通りに、だな)

そう考えて気絶した女を抱えようとしたところでふと気づく。自分は、もともと一人男を背負っているのだった。オーヴァードの身体能力を持つてすれば人間二人くらいどうつてことないのだが、疲労困憊の身体には流石にこたえる。

(「ー本当に、めんどくさい女だな……)

少し忌々しげな目で女を見やると、そのまま気怠げに俵を担ぐような形で二人を担ぐ。

まだ少し上がったままの息を整えて、そのままコミヤは、夕暮れの向こうへと消えていった。

◇

「ん……」

頭が痛い。記憶がおぼつかない。今は、いつ?ここはー

ー眩しさを感じて、ようやく目を開いた。だが、その景色は、真つ白な部屋と、窓

から射し込む遮光に照らされた花瓶だけ。清潔感溢れる空間ではあったが、見覚えがない。

「……は……？ 私は……？」

うわごとのように眩きながら、首を動かす。動くかどうかも不安だったが、なんの話題もなく動いた。

見渡せば、これまた見知らぬ少年と少女。少年は窓の外の景色をカーテン越しに眺め、少女はそっぽを向いて俯いている。

「……は？ あなたたちは誰……？」

不安に駆られて問いかける。少年はその一言で朱が目覚めたことに気がついたように、安堵した笑みを浮かべた。

「ああ、気がついたみたいだね。よかったよかった」

「よかったーって、私あなたのこと全然知らないんですけど……どうして？」
その朱の一言は以外だったようで、少年は首を傾げた。

「あれ？ コミヤさっきー」

少年は不思議そうにコミヤと呼ばれた少女の方を見やったが、相変わらず俯いたままだ。少年も何かを察したように言葉を遮ろうとしたが、コミヤがようやく口を開いた。

「知らん。お前が対応しろ」

「んなっ……」

あまりの物言いに少年は少し身を乗り出しかける。だが、時と状況を鑑みて我慢したようだ。

「あ、あー。これは失礼ーし、しました」

「はい」

急にしどろもどろになる少年に首を傾げながらも、朱は頷いた。

「ぼー私は、神宮寺シユン。目覚めたばかりで申し訳ないんだけー申し訳ないかもしれないが、えー……やっぱなれないな。クソツ」

「……普通でいいだろ？いつもの喋り方で。変に気取るなガキ」

何故か自分の喋り方に悪態を吐くシユンに、やたらと口の悪いコミヤ。二人の顔を交互に見ながら朱は困惑する。

「……あー。わかったわかった。そうだな。うん。ーじゃあ、すまないけど、この喋り方で。まずは、どこから話そうかー」

続いてシユンは、朱に話せることを全て話した。朱はレネゲイドというウイルスに感染し、オーヴァードという異能力者になったこと。今回の事件にはFHというオーヴァードの組織が関係しているということ。そしてシユンとコミヤはFHに対立する

UGNという組織の人間で、今回の犯人を追っているということ。かなり長い話になったので、シユンもすこししどろもどろになりながらも頑張つて説明する。

「朱は、あまりにも突飛な話にやはり困惑しているようだった。当然だ。日頃普通に暮らしていれば絶対に関わることのない話なのだから。」

「——えつと……ごめんさい。君が頑張つて教えてくれたのはわかるんだけど、あんまり理解が追いつかないっていうか——」

しばしの沈黙。そして——

「つまり私は、変わってしまった——ってことなの？」

「——まあ、そうなるね」

シユンは首を縦に振る。あまりにもあつさり突きつけられた衝撃に、なお気を失いそうになりながら言葉を紡ぐ。

「——それって、戻れたりしないのかな？」

「んー。色々頑張つてる研究者も居るみたいだけど、基本的には戻ることは不可能だね」

大真面目に答えるシユン。あまりにも非日常なその言葉に、現実ではないのかという希望にすら縋りたくなる。

「こんなことかとは思うけど、そもそも、子供の君に言われても正直信じ

がたいというかー」

「どつー」

朱の言葉を聞いた途端、先程と同じように顔を赤くするシユン。ただ、今回も分別をわきまえたのか、ギリギリのところまで踏みとどまったようである。

「ところで、隣にいる女は、さつきから全然喋らないけどーどういう関係なの？」

「ーん？ コミヤかい？ コミヤは僕の部下だよ」

「ああ。不本意ながらな」

相変わらずの仏頂面で答えるコミヤ。しかし、朱はその様子にどこか見覚えがあったようだ。

「ーねえ、あなた、コミヤさんっていうの？」

「そうだ」

「どこかで見ることがあるようなー」

「私は知らない」

そう最低限の会話を交わすと、コミヤはすぐにそっぽを向いてしまった。気分でも害してしまったのだろうか。

「ーそつか。私の見間違いだっただかもしれないね。ごめんなさい」

朱は瞠目し、今話された言葉を反芻する。あんな事件に巻き込まれて、こんな目に

あつて知らない力を手に入れて。私は――

「――どうすればいい？今話してもらつたように、力を誰のために使つていいかも分からないし、あなた達のように世界のために使つていいかも分からない。まだ何も、何も、分からないんだ」

深く、静かに自分に問いかけるように口に出した。分からなかつた。子供の頃に憧れた、ヒーローみたいないな力。馬鹿みたいな話だが、冗談でもない。朱は苦悩する。

そう一人静かに考える朱の姿を見て、シュンもまた別のことを考えていた。「誰かのため」「世界のため」朱はそう言つていた。こんな状況に巻き込まれて、こんな現実を突きつけられて。それでもまだ、彼女は人のためにと考えている。彼女ならば、もしや――

「――話だけ、聞いてほしい。僕とコミヤの所属しているUGNという組織は、僕たちのような過ぎた力を持った人々を匿うためにあるんだ。考えてもみてくれ、こんなメディアに出れば大変な騒ぎになるような力の持ち主が世間に出てしまつたら大変だろう？だから守つてるんだ。社会を――そして、自分達を。UGNは、そういう組織なんだ」

「――なるほど。理解はできた。じゃあ、同じように力を手に入れてしまつた私もそ

こに入るべきなのかな？」

あまりにもあつさりに乗ってくる朱に標識抜けしながら、シユンは話を続ける。

「ああいやー別に強制っていう訳じゃない。あくまでもUGN側から保護するっていう形もできる。そこは君の自由だよ」

「ーっつか。でも、私が助けなかつたら、助かるはずだったものまで助からなくなる可能性だってあるんだよね」

そう言つて自分の掌を見つめる朱。シユンも、そんな彼女の様子を見て、一つの決心がついたようだ。

「ーっこの、レネゲイドのもたらす力は恐ろしい物だけど、正しく使うことができれば、心強い味方にだってなる。君さえよければ、UGNで力の使い方を知る事だって出来る。その力を正しく使つて、社会を守る事もできる。……どうだい？」

朱はそんなシユンの言葉を聞いて、しばらく固まっていた。ーっただ、一言。

「ーっつか。ごめん。直ぐに返事はできないけどーっもう少しだけ、考える時間は、あるのかな？」

「ーっああ。それについては大丈夫。ゆっくり考えてくれていい。その間は、UGN側でしつかり君のことを保護するから。心配はいらないよ」

「本当にごめん。ただ、まだ状況も飲み込めてないし、自分の中でも整理がつけられて

ないんだ。まずは、自分の整理からさせてほしい」

真面目な顔で頷く朱の瞳に、微かに炎が灯ったのが見えた気がした。まだそれは何色になるかも分からない小さな灯火だったが、シユンはもういいようだ。

「……うん。分かった。ーおいコミヤ。そろそろ帰るぞ」

「……」

コミヤは無言で頷き、この場を背にする。続いてシユンも出て行こうとしたところでー

「ちよ、ちよつと待って!!」

「うん?」

「シヨツピングモールが爆発したところまではまだ微かに覚えててー傍らに、もう一人居なかったかな?名前は、森藤涯って言うんだけどー」

「……友ー達?」

シユンは己の頭脳をフル回転させ、自分の記憶を辿る。確かに朱一人ではなかった気がする。

「あつ」

(あつヤバい忘れてた。そういえばもう一人いたな。そういえば名前もーそうだった)

「あつ、いやつ、ええと、うん。もちろん。UGNが、しっかり保護してるよ。もちろんさ。うん。なんにせUGNは正義の味方だからね。当たり前だよ」

若干冷や汗をかきながらどうにか誤魔化すシユン。当然のように忘れていたとか死んでも言えないのだから――

「ん？ そうなのか。あの後保護されたのだなアレ。」

あまりにもサラツと忘却宣言をするコミヤに、顎が外れそうになるシユンだったが、どうにかこらえてコミヤにヒソヒソ話す程度に留める。

『……バツ。ちよつ。おまつ。ここで、そういう事いうとまた怪しまれるだろ』
『……あつそ』

急にヒソヒソ話し出す二人に一抹の不信感を抱く朱。

「なあ、本当に――森藤は保護されたんだよ――ね？」

「――ああそうだな。お前が思う存分に暴れてくれた後で私が回収して――」

「ゴツホオン!!ゴツホオン!!!」

シユンは暴走しかけるコミヤの言葉をわざとらしい咳で遮った。

「ああいや、コイツはそのな。コミヤは凄い凶暴なんだよ。気にしなくていい。うん。コイツが支部の中で暴れ回って何個の机が無駄になったことか――ってイッテエ!!」

饒舌にコミヤの悪業を挙げ列ねようとしたシユンのすねに強烈なトウキックが入っ

た。シユンは足を抱えて悶絶する。

「ーそ、そうなんだ……と、とりあえず、森藤は無事なんだね？」

「あ、ああ。心配はーイテツ!!いらなーやめっ!!いから安心してくれーちよっ、マジ無理本当無理痛い痛い!!」

続いて片腕で関節を極められかけて悲鳴をあげるシユン。側から見るとかなり憐れなのだが、朱にはどうすることもできないので会話を続ける。

「ーそつか。それだけは本当に心配だったから。よかった」

胸を撫で下ろす朱。ようやく解放されたシユンも無事な方の片手で鷹揚に応える。

「ーねえ、森藤は今どこに居るの?そのーUGNの施設とかに居るの?」

「いいや。この同じ病院内に居るよ。幸い傷も浅かったみたいで君と同じくすぐ退院できそうだよ」

「ありがとう。ーさっきの話も、また私がちゃんと整理がついたら話そうと思うから。今日は長々とごめん」

「いいや、大丈夫。ーいつでもこの僕を、頼ってくれたまえ」

小さい身体を頑張つて逸らすシユン。言葉は頼もしいことこの上ないのだが、いかにせん九歳児がそれをやるとー

「あー!!お前本当にかわいいなあ!!そんなちっこいのによく頑張ってるし!!そうだ、飴!飴居る?私イチゴミルク味ならいつも持つててーホラ!あげる!!」

「あー!!子供扱いするなー!!」

そう言つて頭を撫でにかかろうとする朱からジタバタして逃げようとするシュン。気合いで朱の魔手をかいくぐり、病室の外へ出て行つてしまった。

そんな様子を見て少し残念がる朱だったが、まだ隣にコミヤが居るのを見つけた。

「あ!!コミヤも、飴、いる?」

急に手渡された飴に少々びっくりして、しばらく固まっていたコミヤだったがー

「………帰る」

そう一言告げると、これまたそそくさと出て行つてしまった。

誰もいなくなつた病院で、朱はちよつとだけしよんぼりしながら、布団を被る。色々あつたが、先の事は目が覚めてから考えよう。幸い、時間はあるようだからー

ー結局、衝撃と興奮覚めやらぬまま朱は布団に潜りこみながらも夜通し考え抜いてしまった。そして翌朝、ついに導きだした結論はー

ヒーヒーローになる。
だった。

シーン5—1 「日常」

朝日を照り返す学校の校門。あの嘘みたいな一件から僅か一晚。朱は再び日常へと帰っていた。あれだけの大きな事件だったにも関わらず、こうしてまたこの場所に戻ってこられたことを本当に嬉しく思っていた。

ーだが、彼らからの話を聞いてしまった以上、どうしても心に残ったモヤは晴れないままでいたのだが。あの後UGNに加入する意思を伝えたのはいいものの、具体的ことはまだ何も言われていない。全く同じ平穏な日々に戻ってきた筈なのに、景色はなんだか変わってしまったような気がした。

「おはよー」

挨拶をしながら教室に足を踏み入れると、クラスメイトの話す声が普段よりも多かった。

「また昨日爆発事故があったみたいだぞ？」

「えー。今月でもう何件目よ？」

少し耳を傾けてみると、どうやら昨日の噂でもちきりのようだ。まあ、この近辺でもかなり有名なショッピングモールだったし、最近頻繁している爆破事件とあつては話題

になるのも無理はないだろう。

だが、朱にはそんなことよりも気になることがあった。同じく事件に巻き込まれた、森藤の安否である。昨日シユンから聞いた話によると大した事は無かったそうだが——彼の定位置の席に目線を向けるのは、すこし怖かった。

——だが、そんな心配はどうやら杞憂に終わったらしい。彼は、いつもと同じように気怠げに机に頬杖をついて座っていた。窓の外をぼーっと眺めているのもいつも通りだ。

「森藤う——!!」

その姿を見た瞬間、朱は速攻で森藤に走り寄った。唐突な行動に回りがギョツとするが朱は気にしない。

「——お? おお!」

急に駆け寄られて驚いたのは森藤も例外ではなかった。オーバーリアクションで後ろに仰け反り、椅子ごと倒れそうになる——が、朱に肩を掴まれ難を逃れる。

「おはよう!! け、ケガは?! もう大丈夫?!」

「——あ、ああ。なんかかすり傷だったみてえでな。大丈夫だよ」

その言葉を聞いて朱もほっと胸を撫で下ろした。

「……よかった。もうすつごい心配したんだよ!! よかった。本当に何もなくて」

幼少期からの親友である森藤は、朱にとってもっとも大切な人間だった。両親のことで彼女が暗く沈んでいた時も、手を差し伸べ、救ってくれたのは彼だったのだ。

「いやあでも、変な事件に巻き込まれちゃったね」

「ああ。よりによって休みの日に行つて爆破事件とか……あるかよそんなの」

そう悪態を吐く森藤の横顔を見ながら、朱は安心すると同時に一つの罪悪感に苛まれる。そうだ。元はと言えば――

「――なんか、私が無理やり連れて行かなかつたら巻き込まれることも無かつたんだよね。……ちよつとだけ、反省してる。ごめんね」

いつになくしおらしくなる朱にどう返したらいいかつまる森藤。普段から振り回されている彼にとって、謝られる事は珍しいことだった。

「――まあ、良かったんじゃねえの?……無事だったんだから」

「そうだね。あれだけの爆風だったし、かすり傷程度終わつてで良かったね。本当に」
改めて無事に日常が帰つてきたことを噛みしめる二人。次に口を開いたのは朱だった。

「――あ、でもあんまり無理はしないでよ! 体育とかお互いに休もうな!! なんか体動かしたらいけない気がする。ね? ね?!」

「体育休んでいいのかよお前。生きがいだつたんじゃねえのか?」

「ーいやあー!!まあ、そうだけど、だけどね!じゃ、じゃあ、私は大丈夫だと思うけど、森藤は休んだ方がいいなーって。蒼羽は、思うよ??」

「……都合のいい奴だな」

呆れたように森藤はため息をつく、窓の外を再び眺める。そして、ポツリと言葉こぼした。

「そうだ。お前、昨日ー」

暫しの間。だが、その続きは紡がれることは無かった。

「ーああ、やっぱなんでもねえや」

「……どうしたの?何かあったの?」

朱の声が少し震える。表面上は平静を装っていたが、完全には無理だった。昨日。自分があの方に目覚めた日。なにも後ろめたい事は無い筈なのに、何故か言い知れない不快感が襲ってきた。

「いや、なんでもねえって」

「ーなによお!何かそんな!全く!!朝から意味深な雰囲気出さないでよ!もう!!」

「やかましいわ!」

笑顔を作る朱。いつもの楽しげな会話だったが、距離ができてしまった気がして少し

寂しかった。誰も悪くないし。なにも隠していない筈なのだ。——筈なのだが。

「——まあ、ただ。何かいいたい事があるんだつたらいつでも言つてよ。隠し事は寂しいからさ。ね？」

「——ああ、そうだな」

あくまでも気さくな口調だったが、果たしてその言葉は、森藤に向けた言葉だったのか。もちろんそれもあるだろうだが、自分にも言い聞かせるように言つたのではないだろうか？

朱の胸の中には、未だ言い知れないモヤモヤした気持ちが渦巻いていた。

「じゃあ、授業頑張ろうね？」

「——ああ」

朱は話を切り上げると、自分の席へついた。当たり前のようにある自分の机があった。たかつた。一日ではあつたが、ここまで感慨深いものだとは。

数分も経たない内にチャイムが鳴る。朝のホームルームのチャイムだ。立ち話をしていた生徒達も席に着く。すると、教室の前扉がガラガラと音を立てた。そこから表れたのは、後退した白髪を湛えた教師。少しよれたスーツと曲がつた腰が年季を感じさせる。

彼はこの学級の担任であり、生徒からの信頼もまあまあ。俗に言う、どこにでも居が

ちなおじいちゃん先生だ。

「えー。それではホームルームを始めます」

見た目相応の少ししやがれた声で、話を続ける。

「昨日もね。爆破事件がね。あつたみたいだね。えー。蒼羽さんと森藤さんが巻き込まれてしまったみたいですけども……大丈夫ですか？二人は」

「あつはい。私は大丈夫です。ーーただ！森藤が心配なので！！森藤は！！体育を！！お休みします！！」

「ーー誰もいつてねえだろそんな事は！！元気だよ！ピンピンだよ！！」

「えー！でもー」

食い下がる蒼羽に頭を抱える森藤。そんな様子を見て教師も口を開く。

「えー。二人ともいつも通り元気だそうで。良かったですねえー」

クラスからドツと笑い声が上がると、立ち上がっていた蒼羽は恥ずかしそうに再び座った。なごやかな空間。朱は、ようやく本当に日常に戻ってきたのだと実感した。世界の裏側ともいえるべき衝撃的な事実。それを知ってしまった、片足すら突っ込んでしまった自分に今でも、帰るべき日々があるのが本当に嬉しかった。

自分の席から周りを見渡すと、そこには見覚えのある顔があった。白髪の少女。昨日とはまるで印象が違い気弱な印象すら受けるが、彼女はコミヤだ。見覚えがあるのはこういう事だったのかと納得する。

目があったので手を振ってみたが、プイツと目を逸らされた。冷たいコミヤの反応に少し落ち込む。

彼女の印象が薄いのは恐らくコミヤがクラスでは陰のある少女を演じていたためだろう。確かに存在は知っていたのだが、学校ではおしとやかな美少女で名が通っていたため、病院のときはイメージが違いすぎて結びつかなかったのだ。

コミヤを意識したことで、自分の置かれている現状を再び考え始める。

昨晚、散々悩みぬいた末神宮寺に連絡を取った。彼らーUGNのことは、正直たまに胡散臭いことも言っていた気もするし、完全に信頼しているわけでもない。だが、あの二人には奇妙なシンパシーを感じた。

それに、幼いころのあの後悔を再び繰り返したくもなかった。こんどは自分が助けみせると誓った。そしてその手段まで手にいれた。なかったことにして日常に帰ることはできなかつた。

あの頃、自分の思い描いたような、テレビで夢みたような――

――そして、私を救ってくれた「彼」のような。そんなヒーローになれるかもしれないのだ。ただの自己満足かもしれない。もしかしたら、周りに迷惑までかけてしまうかもしれない。それでも私は、彼らに協力することにした。

もう引き返せない。力は消えることは無いそうだ。だったら、それを人のために使えるなら幸せなことなんじゃないかと思う。これからどうなるかも分からない。

窓の外の木の葉が風になびいた。誘われた一片が開いた窓から飛び込んでくる。

この平穏な日常と、顛れてしまった非日常。

行く先はまだ、誰にも分からない。

シーン5—2 「迫る暗雲」

キーンコーンカーンコーン。

幾度と聞きなれたチャイムの音。音がなるやいなや、クラスから一斉に廊下へと人々がなだれ出る。

幸いなことに、今日一日はなにも起こることは無く、いつもどおりの平穏な時間が流れた。あんなことがあっても日常は日常でいてくれたのだと改めて感慨深くなる。

森藤も帰りの支度が終わったようだ。今日は一緒に帰ると決めていたので、鞆を持って、森藤の側へ。

——ふと、肩をつかまれた。

「おい、お前は残れ」

「へ？」

気の抜けた声で後ろへ振り向くと、そこに居たのはコミヤだった。

「話がある。最優先だ」

「いや、でもこれから森藤とー」

「ガタガタ言うな。お前はもう一般人ではないのだぞ」

もう一般人ではない。その言葉が重くのしかかる。この現実を正面から突きつけられたような感じがした。私はもう、本当の意味での日常には帰れないかも知れないというのだ。

「ーわかった」

神妙な顔でうなずくと、森藤の方へと向き直る。残念ではあるが、仕方が無い。

「ごめん森藤。この後ちよつと用事できちやつて。先帰つてくれる？ごめん!!」

「あ、ああ。わかった」

急な申し出に若干困惑したかにみえたが、それは幼馴染の関係だ。朱のことはちゃんと理解してくれる。

「じゃあ、さき帰つてるわ」

そう鷹揚に手をふる、一人で教室を出て行った。教室に再び静寂が戻る。気がつけばもうコミヤと朱の二人しか残っていない。あつた。

コミヤは一旦ドアから外へ首を出し、あたりに人気が無いことを確認すると、虚空に向かつて語りかけた。

「おい神宮寺。出てきていいぞ」

「……………」

首をかしげる朱。だが、その反応はすぐに驚嘆へと変わることになる。

目の前の何の変哲もない学校机。その中から、ド○えもんよろしく人の頭がにゅつと飛び出てきたのだ。

「えっ?!えっ?!」

そしてそれは頭から首、首から体と順々に現れる。数秒もたたないうちに、一人がすっぽりと出てきてしまった。あまりにも信じがたい光景だったので、コミヤを方を向いて助けをもとめるが――

「…………… きもちわる」

そう微かに呟いたのが聞こえた。

一方の机から出てきた彼は――

「やあ、またあったね」

「またあったねもなにも…… そういうところから出て来るもんじゃないでしょお?!」

「…… いやまあ。これが僕の能力だから」

「あつ。うん。そうだね。そうだったね……」

一応はうなづく朱だったが、状況に頭がついていかないらしい。まあ、それこそアニメで見るとような光景なので、驚くのも無理はないのだが。

このシュンの能力は「デイメンジョンゲート」というオーヴァードの力の一つだ。任意の空間にワープする扉を作る事ができる。俗に言うどこでもドアのような物だが、侵食率をそれなりに喰うためそこまで気軽に使えるわけでもない。

なにはともあれ、放課後の教室にこうして昨日の面子3人が集ったのだった。

「さてと、今日は昨日の事件についての調査をするんだけど…… 蒼羽?」

最初に話を切り出したのはシュンだった。先日から調査を続けているディアボロスと関連のある事件に巻きこまれた当事者が身内にいるのだ。またとないチャンスだろう。

「昨日の爆発事件の詳しい状況を教えて欲しい。なんでもいいんだ。……例えば、直前に怪しい男を見た!とか」

シユンの問いかけに、朱は首を振った。

「それは…… 本当に覚えがないんだ。記憶がおぼつかないのもそうだけど、本当になんの前触れも無く起こったから」

「…… そっか。ごめん。まだ辛いだろうに」

「いや。全然大丈夫。——それに、私も許せないんだ。その——今回事件を起こした「ディアボロス」って奴のことが。あの場に居た沢山の人の幸せを奪うだなんて許せることじゃないと思う。だから私のほうから協力させて欲しいんだ」

そう言い切る朱の瞳には、確固たる決意が灯っていた。

「——わかった。じゃあ、このまま話していても埒があかないし——情報収集から始めようか」

「情報収集?」

「うん。本来なら僕一人の仕事なんだけど、恐らくもうほとんど時間の猶予が無い。せっかくだし、3人で分担すれば速いと思うんだ。必要な情報は三つ。昨日の爆発事件のこと。さつき蒼羽も言っていた、「ディアボロス」こと春日恭二のこと。そして最後に——君の友人、森藤涯のこと」

森藤。その言葉を聞いて朱の顔つきが少し変わった。彼はもう事件とは無縁になったものだと思っていたのに。

「ーど、どうして森藤を？私が本人に聞けばいいだけのことじゃー」

「あの爆破事件に居合わせた生存者はすごい貴重なんだ。君はもちろんのこと、一緒に生き延びた森藤涯も例外じゃない」

「で、でも森藤のことを色々内緒で嗅ぎ回るなんて私ー」

「彼には平穩に過ごして欲しいといったのは君だろう？だったら、なおのこと本人に伝えるわけにはいかない」

シユンの小さな体軀から紡がれる言葉は正論だった。朱は自分の考えの甘さを叱責する。

「ーそうだったね。ごめん」

「いや、別に責めてるわけじゃないんだ。謝らなくてもいい。どうする？森藤のことは僕たちが担当してもいいけどー」

「ううん。私がやるよ。目を背けるのが、一番よくないと思うから」

「わかった。……おい、コミヤー」

シユンは、先ほどから黙りこくっていたコミヤのほうを向いた。

「ん。私はディアボロスの調査を続ける。お前は昨日の事件のことでいいな？」

「ーだよな。まあ、なんとなくわかってたよ」

最小限の言葉でやり取りをするコミヤとシユン。仲が悪そうに見えて意外と相棒的な立ち位置なのだろう。ー以心伝心、という奴だろうか。

「じゃあとりあえず収集開始だけどー蒼羽には、これを」

素晴らしいながらシユンが渡してきたのは、人の名前らしきものがずらつと並んだりストだった。

「これは？」

「UGN関連組織の人事リストだ。僕たちの支部の人間ではないが、そこに協力的な人間が載っている。森藤のことはそいつらに片っ端からきいたら少しはつかめるはずだから、参考にして。この学校にも潜入してる人間が居るはずだから、そいつらへの聞き込みから始めよう」

「わ、わかった」

朱は神妙な顔でうなずいた。

「おっけー。じゃあ、ある程度区切りがつき次第ここに戻ってくるってことで」

「うん」

「了解」

3人はうなずくと、それぞれの場所へ動き出した。

◇

「おっけー。じゃあ情報を出し合おう」

情報収集のために解散した3人だったが、数時間後には各々の情報を持って再び教室へと戻ってきたのであった

「じゃあまずは僕から」

シユンはそういうと、手帳を胸ポケットからとり出した。ノイマンの彼にとつて、本来ならば必要の無いものなのだ。だが、それ以上の意味があると言いつ張つて、シユンは常日頃から手帳を持ち続けている。

「僕は爆破事件のことについてだね。今回の事件は、最近よく起こっている一連の爆破事件として捜査されているんだ。報道では死傷者だけで生存者は無しってことになっ

てるけどーまあ、現状を鑑みればフェイクだってことがわかるね。他のケースでは行方不明扱いの人もいるみたいだけど、今回はいないみたい」

凄惨な事件のその後。当然聞いてもいい気持ちはいしなかった。やりきれない気持ちの行く先になやんでー机にぶつめた。

「クソツ。人が死んでるんだよな。やっぱり」

「ーうん。そうだね。だからこそ、僕たちが止めなきゃいけない」

シユンも苦々しい顔をして、地面を見つめた。彼自身の胸にも、救えなかった人々への無念が渦巻いているのだ。

「ーよし。じゃあ、私の聞いてきた情報を出すね」

コミヤとシユンは、うなずいて朱をうながす。

「私は、森藤についてだったね。大した情報は得られなかったけど、気になるのがひとつ。ねえ、森藤の記憶ってなくなってるの？」

シユンは、その問いに少し啞然とした。仕事をなれさせるための一環として朱を派遣したので、大した成果は期待していなかったのだがーまさか、そんな情報を拾ってくるとは。しかもあまり朱に知られたくない情報だ。うかつだった。

「ねえ？ UGNが消したって本当？ あなたたち、本当にー」

「い、いや。そのとおりだけど、悪意があつてのことじゃない。オーヴァードの存在を秘

匿するための措置なんだ。嘘じゃない。別に彼に異常は無かっただろう？ 疑わしいかもしれないが信じてくれ。頼む」

「——そう、なんだ。まあ言いたいことも分かるけど。なんとなく変だなって思っただけだから」

「すまない」

朱はシユンの言葉をとりあえずは信じることにした。小学生を責めるのもあまり気の進むことではなかったし、言い分も納得できる。ただ、友人の——特に森藤の記憶を操作されているなんて、気持ちのいいことではなかった。

「——じゃあ、最後にコミヤの報告で」

先ほどから黙りこくっていたコミヤがようやく口を開く。

「私か。じゃあ、こいつだな」

コミヤはおもむろにポケットに入っていた封書を出した。まだ開けてはいないようだ。

「ある人からの伝手で手に入れた。まだ私も確認はしていないのだが——その人によると、仲間と一緒に見るようにと」

「……そうか。じゃあ読み上げてくれるか？」

「分かっている。どれどれ——」

封書の中には、質素な紙が丁寧な三つ折りが入っていた。コミヤが机において、そのまま開く。

「『ディアボロス』こと春日恭二は、最近ここ近辺に出没しており、不穏な動きを見せている。ここからが調査の最大の結果だが、『ディアボロス』は賢者の石と呼ばれるものを探し出すため、爆破事件を起こしてきたようだ。今回は、遭遇者 a（蒼羽朱）と、共に居た友人（遭遇者 b と呼称）の二名が覚醒が確認されており、遭遇者 b が賢者の石保有者の可能性が高い。また、そのために F H から狙われているとも推測され、今後の扱いの検討が必要——」

この場にいる全員の表情が凍りついた。蒼羽朱と一緒に居た友人。つまり——
「森藤が——？う、嘘——」

朱は地面に崩れ落ちた。顔をおさえて、肩を震わせている。森藤が狙われている。この事実には、蒼羽は冷静ではいらなかった。

一方、こちらも文面を見つめて驚愕していたコミヤは、すぐさま声を張り上げた。

「おい蒼羽!!おい!!返事をしろ!!」

「………… え？わ、わたし——」

「ああそうだお前だ。森藤涯はどこにいる?!今どこで何をしている?!」

コミヤの凄まじい剣幕に押されながらも、朱は必死で言葉を搾り出した。

「森藤は私より先に帰ったから、今はきつと家にー」

「バカ!!家に無事に帰った保障なんてどこにもないんだぞ?!もしかしたらもう既にどこかでー蒼羽、森藤涯の番号はわかるか?!」

「ーう、うん。私も心配だから。連絡、とってみる」

「頼む……!」

朱は慌てた様子で鞆からスマホを取り出した。幸いなことに、森藤の履歴は上のほうにあった。画面をタップして、電話をかける。

静まり返った教室に、電話のコール音だけが響く。とても長い間。そしてー
ガチャ。

繋がった音は聞こえた。だが、その後に空虚に続いたのは、〈着信拒否〉の文字。

「し、森藤に切られた?わ、わたし……今まで一度も森藤に拒否されたことなんてなかったのにー」

「…… 帰り道は?」

教室に響く朱の号哭。

「森藤涯の帰り道はどっちだ?」

「………っ」

「森藤涯の帰り道はどちらだと聞いている?!」

泣き叫ぶ朱に、容赦なく怒鳴りつけるコミヤ。震える指で朱は、森藤の方を指差す。

「……クソツ!!」

コミヤは悪態をつくくと、乱暴に教室の窓を開けた。そしてそのまま、窓から飛び出し、三階のペランダから跳躍をする。オーヴァードならではの芸当。だが——

「待て!!」

そのコミヤの行動は、すんでのところで阻止された。忌々しげにコミヤが後ろを振り返ると、両手をかざしてコミヤを空間につなぎとめているシュンの姿があった。

「なんだガキ?! 離せ!! 時間がないんだぞ?!」

「落ち着けコミヤ。どう考えても僕の引き出しの方が早い!! いいから戻れコミヤ!!」

ディメンジョンゲート

コミヤは観念したように力を抜くと、そのまま室内へと帰ってきた。

「やれやれ。コミヤ一人で見るなつて意味が分かった気がするよ。——蒼羽、立てるね?」

「——う、うん……」

「時間がない。急ぐよ!!」

そう叫ぶと、シュンは目の前の空間に一人一人入れる程度の黒い空間を作り出した。

それをみたと同時に、コミヤはそこへ飛び込む。後ろを見れば、続くように促してい

るシュンの姿。

意を決して、朱はそこへ飛び込んだ。

ミドルバトル

シーン6—1 「敵との対峙」

日の傾いた頃。踊る影は三つだけ。ときおり立ち止まりながらも、縦横無尽に駆け巡る。

「そつちは?!」

「ーいいないな」

「待て、こつちに人影がー」

募る焦燥。1分1秒の遅れが致命的な事態を招きかねない。

ーそんな彼らの祈りに応えるようにか、はたまたそれすらも踏み躪るようにか。探し求めていた姿はようやく現れた。

そこは、ちょうど一目にはつかず、それなのに絶妙な加減で陽の光が差し込む袋小路だった。ビルの作る斜影に隠され、おぼろげに存在が分かる程度だったが、確かにソレはそこにいた。

「よお。忌々しき……UGNの皆さん」

陽光に照らされ、不明瞭だった顔の輪郭が明らかになる。

オールバックに、縁のある眼鏡。全てを見下したような下卑た眼差し。間違いない。彼こそが——

コードネーム、「ディアボロス」。またの名を春日恭二そのものだった。

その姿を見た瞬間、すでにコミヤの手には刀が添えられていた。今にも飛びかかりそうに身をかがめる彼女に、朱が耳打ちした。

「……ねえコミヤ。あの人誰なの?」

その朱の問いに対して、コミヤはイライラを露にしながら答える。

「聞いてなかったのかお前?アレが森藤涯を狙ってるかもしれないんだ!!」

「……ツー本当?こんなところに出てくるなんて——」

唐突に訪れた危機に絶句する朱の言葉を遮るように、春日が口を挟んだ。

「おいおいそこのお嬢ちゃん。どうか気を荒げないでくれ。——今日オレは戦いに来たわけじゃないんだ」

ゆつたりとした口調でのうのうとしゃべる春日に不快感を覚えながらも、コミヤは手にかけてた刀を離れた。

「——じゃあ何しにきた?どうしてこんなところに居る?」

「なあに。最近覚醒したばかりの迷える子羊をな。少し導きにきただけだよ」

「ほう。——その面でか？」

苛烈する二組の雰囲気。だが、春日は論点を変えてきた。

「——おいおいおい。お宅UGNとFH、何が違うっていうんだ？可笑しいよな？」

あざ笑うかの如くこちらを辟易する春日。その口ぶりには、たつぷりの皮肉が込められていた。

「……ああ、確かにそうかも知れんが——」

例によってコミヤが言い返そうとする。しかしシユンが口を挟んで、一言。

「予算が違う」

シユンの言葉に少し目を丸くする春日だったが、ようやくこめられたニュアンスを理解したのか苦笑した。

「クツクツクツ。それは痛いところを突かれたな。……まあいい。決めるのはそのお嬢ちゃんだ」

春日は蒼羽をゆつくりと指差した。それに対して朱は怪訝そうに眉をひそめる。

「——なんだよ」

「そのガキと嬢ちゃんに何を吹き込まれたかは知らないが——此方にくれば、その力

の使い方、余すことなく教えてやろう」

辺りを風が通り抜けた。宙を舞う木の葉が再び地面に落ちる。朱は、やたらと上から目線な男を不振に思いながら言葉を返した。

「なるほど。お前達……は、UGNとは違う組織なのか？」

「——ああ、そうだな。こっちはお前らみたいな仲良し団体とは全く違う。F H。それがオレの組織の名だ」

「F H——それは聞いたことがある。二人から教えてもらった」

春日はその言葉を聞いて口の端を上げた。行ける——春日はほくそ笑む。

「オレ達は特別な人間なんだ。——いや、もう人ではないな。そう、特別な存在。まあ大方、その二人にやれ力を抑えろだの面白くもないことを言われたんだろうが、そんなんじゃないだろう？」

「——でも、力を抑えないと、壊してしまうものも、失ってしまうものもあるんじゃない

のか？」

よわよわしい声で反論する朱に、春日はさらに畳み掛けた。風は先ほどよりも強くなっている。

「そんなもの気にするな？得られるものだっていっぱいある」

朱は葛藤した。彼の言葉を信じていいものか？だが、その言葉に委ねれば今抱えている日常への不安もすべて拭ってくれるのでは？

甘い誘惑が、朱を誘う。

「確かに得られるものも多いかもしれないけど、私は、私はー」

風の唸る音がさらに大きくなる。吹き飛ばされた空のゴミ箱の音が市街地に響き渡る。ーそして、その末に。

「私は、できるだけ多くの人を助けたいんだ。もう犠牲者を出したくない」

朱は、真正面から春日の目をはつきりと見て言い放った。春日は少し固まっていた

が、やがて堪忍したかのように肩を落とした。

「——なるほど。お前はそちら側か」

その言葉の中には侮蔑的なニュアンスもあつたが、朱は全く気にしない。

「——風は、いつの間にか止んでいた。」

そんな朱は、遂に本題へと切り込んだ。到底許すことのできる相手ではないが、彼のことさえ聞ければ今は争う必要は無い。

「ところで、森藤は——お前のところに居るのか？」

暫しの間。だが、春日は大仰な調子でかぶりをふつた。

「はて？……誰のことかな？」

「しらばっくれてたらただじゃおかないぞ。ちゃんと教えてくれないか？」

朱の愚直なまでの問いにも、春日は真面目に答えなかつた。

「ん——……いやいや。わからないなあ？」

「駄目だぞ蒼羽。コイツらはな、言えといつてそう言うようなバカではない——いや、バカなのは確かか。うん」

沈黙を破り、間に割つて入るコミヤ。続けてシユンも口を挟む。

「……おい。——まあ、わかつたよ」

シユンは一度瞠目すると、再び話を切り出した。

「なあ、ディアボロス」

「なんだ？ガキンチョ」

「んなつ……！ガキンチョっていうんじゃねえ!!」

シユンは顔を真っ赤にしながら反論するが、ディアボロスは我関せず、といった調子で飄々とまくしたてる。

「おいおいおい。穏健なUGNさんが、そんなに青筋たてていいのか？」

「……うるさいな。おい！コミヤー！」

シユンはコミヤに助け舟を求めた。だが、返ってきた言葉は――

「なんだ？ガキンチョ」

シユンはその場で歯軋りをして今にも暴れだしそうな勢いだったが、今回はどうにかこらえたようだ。

「……今のガキンチョだけは許してやる。だからコミヤ。さつさとコイツをぶつとばして、吐くもの吐いてもらおうぜ？」

「――ああ。もちろんそのつもりだ。私の仕事はコイツを捕まえることだからな」

二人そろって睨みつけてくる状況だったが、春日は肩をすくめておどける。

「おー怖いねえ。ついにUGN様も手を出す時代になったか？」

高まる緊張感。朱はその状況を見ながら問いかけた。

「……コミヤ。戦うの？」

「ああ。もちろんだ」

朱は俯いた。自分の中のかなかと対話するように。時間にしては数秒もなかっただろう。そして、目を見開いた。

「コミヤが戦うならー私も戦う」

その瞳には確固たる意思が灯っていた。だが、シユンはそれでも朱を制止しようとする。

「それは待ってくれ。君はまだ覚醒したてでー」

言葉に詰まる青羽。だが、そこにコミヤが口を挟む。

「なあに。コイツが暴れたら、手足の一本や二本や三本ーいや、コイツの場合は二本かーをぶった切ってやればいい話だろう？」

「……バツ、またそういうことを言うとUGNの信用がー」

「そのためのお前だろう？」

「……」

コミヤに言いくるめられ、手も足もでなくなったシユンは、やけくそで髪を掻き筆る。どうやらもう止めることは無理だと判断したらしい。

「あーもう!!ーあんまり僕かコミヤの側を離れるんじゃないぞ?!」

その言葉と同時に、シユンの周囲が歪んだ。一瞬不穏なもやに包まれたかと思つたソレは、序々にその姿を現していく。

ー気がつけば、辺り一面に無数の黒い球体が浮かんでいた。いや、球体と呼ぶには相応しくない不自然な凹凸がある。そう、いうなればソレは『魔眼』としか形容しようのない何かだった。言い知れぬ不気味さと不吉さが漂っていたが、幸いなことにその敵意は春日恭二にのみ向けられていた。

ふと冷静になってみれば、その魔眼を操っているのはシユンのようだった。そう、これ自体も、彼のオーヴアードとしての能力の一種なのだ。魔眼と重力を操るシンドローム。その名もへバロールの。

春日に向けられるシユンの敵意は、先ほどよりも確実に増していた。戦闘体制。まさにこの言葉のとおりだろう。

対する春日も黙っては居なかった。彼を覆うビルの影が、より一層濃くなっていく。「ふむ。こうなってしまうてはー」

その暗闇の中から、紅く、禍々しい灯りが明滅した。

「正なる防衛ーだよなあ?」

強く、響こうとしていた。

辺りを包む不穏な気配。

血と闇と混沌の香り。

戦いのゴングが今、静かに——故に力

シーン6―2 「人を超えた力」

燃え盛る夕暮れ。空は彼らの力に呼応するが如く煌々と照り輝いていた。オーヴァード

対峙する二つの力はとどまるところを知らない。感情と感情のみが、ただそこでひしめき合っていた。

〈ディアボロス〉は暗闇からはつきりと姿を現した。右腕は異形と化しており、紅く、どす黒い禍々しいオーラを放っている。

シユンとコミヤはその光景をいたって冷静に見ていたが、問題は朱。一度決意したのはいいものの、明確に形を持つて迫る彼女にとつての「非日常」に戦慄しているようだった。

「おい、蒼羽」

コミヤが〈ディアボロス〉から視線を逸らさず、声だけをかけると、朱はビクツとして反応する。

「は、へ?」

「……いいか、これから私の話すことをよく聞け。お前は戦闘はおろか自分の意思で力を使用したことすらないと思うが、そこは心配しなくていい。お前の力はもうお前のも

のだ。身体は勝手に動くだろうし、強く念じればヘレネゲイドは必ず応えてくれる。ただ、そいつはお前の味方じゃない。使えば使うほどお前を蝕もうとする。決して飲まれるな。——お前の望む世界を、守りたいのならな」

普段の突き放したような言い方ではあったが、その言葉に含まれた朱への感情だけは本物だった。朱は、その言葉を飲み込むように、ゆつくりと、確かに頷いた。

「わかった」

そんな二人の様子を見ていたヘディアボロスへは、先ほどより多少強い語気で語りだす。

「さて、そろそろ準備はすんだか？まずはお手並み拝見といこう——つか!!!」

ヘディアボロスはそう叫ぶと同時に、地面を蹴って蒼羽達の側へ接近してくる。距離にして約五メートル。その差を瞬時に詰め、己の右腕で命を刈り取るうとするが——
——その一撃は、コミヤの一閃によって防がれた。どこから取り出したのか両腕には日本刀が握られており、カタカタと刀身を震わせている。その先で、鋭い刀身に不似合いなほど凶太いヘディアボロスの右腕を確かに受け止めていた。

「なかなかやるなあ。お嬢ちゃん？」

「……」

にやけながら挑発するヘディアボロスを無言で無視し、コミヤは刀で腕を弾くと、そ

のまま横なぎの形で一閃する。後ろに飛びのく〈ディアボロス〉。間髪いれずにもう一振り。だが、その一撃は盾によって阻まれる。

「ヘイジスの盾」……卸したてだが、意外と使えるな」

そう呟くと、右腕に溜めた紅い球体を続けて放つ。当然のように回避するコミヤの背の壁で、球体は紅い鮮血を撒き散らしながら弾ける。

「血……？ディアボロスお前、〈ブラムⅡストーリーカー〉か」

能力を一回見ただけで能力を看破するコミヤに少し驚きながら、それでも〈ディアボロス〉は不気味な笑みを絶やささない。

「そうやすやすと答えるバカではーないもんでねっ!!」

「……ッ!!」

悪寒を感じて身構えるコミヤだったが、振り向いたときには既に遅かった。背後で破裂したはずの血液が凝固し、凶弾となってこちらに向かってきたのだ。飛びのくにはあまりに時間が足りなかった。だがそれでも最後までー

「させるかあっ!!」

ーそのときだった。強烈な熱波がコミヤの顔面を襲った。流石にたまらず眼を瞑

る。数秒も経たないうちに瞼を開けると、そこには愕然とする〈ディアボロス〉の姿。身体を貫く痛みはなかった。

「はあ、はあ……で、できた……？」

そう息を切らしているのは朱だった。肩を上下させつつも、右手を前にかざし、わずかな炎の残滓をまとわせている。間違いない。今のをやったのは朱だった。

「ほお？ 流石にいくら素人とはいえオーヴァードを放置するのはまずかったかな？ まあいい。とりあえずおとなしくしてー」

〈ディアボロス〉は先ほどと同じように手をかざす。今度は朱の方へ向かって。止めようと割って入ろうとするコミヤだったが、流石に〈ディアボロス〉の方が速かった。

狙い過たず放たれた一撃は、朱の身体へ向かって飛んでいく。朱の強化された身体能力ならば回避行動くらいならばできる筈なのだが、足がすくんで動かない。ーしかし、それは一瞬空中で静止する。慣性を失った弾丸はそのまま地面へ。棒立ちの朱に迫る凶弾を防いだのは、これまた両手をかざすシユンと黒い魔眼だった。

「僕も忘れてもらっちゃ困るよ？ 〈ディアボロス〉！」

「ククツ。ガキもガキでなかなかやるようじゃないか。しかし残念だ。お前たちは一人の荷物を抱えて戦わなきゃならない」

〈ディアボロス〉は朱の方をみやる。視線に気づいた朱だったが、ひるむことはない。

「……荷物？——確かにそうかもしれない。けど!!」

朱は語気を強めると、そのまま拳に炎をまとわせて跳躍する。赤色の残滓を纏ったそれは〈ディアボロス〉に直撃しようとして——

「そういうところが素人なんだよ!!」

〈ディアボロス〉はひらりと身をかわす。全力で振りぬかれた拳は空を切り、勢いをぶつける相手の消えた朱の身体はバランスを崩す。

それを〈ディアボロス〉が見逃すはずもなく、振り向きざまに朱とは正反対のベクトルで強烈な裏拳を放った。自身の勢いと前方からの衝撃をモロに喰らった朱はそのまま後ろ側に吹き飛び、路地の壁面に叩きつけられる。

これもオーヴァードの能力なのか、めだつた傷は何一つついていなかった。だが、強烈な痛みが朱を襲う。

「カハッ……」

血反吐を吐く朱。それを見かねたコミヤが声をかける。

「蒼羽!!力に使われるな。お前が力を使え。お前の炎はそんなものか?ウイルスに打ち勝て!これ以上被害を出さないと誓ったのだろう?」

「わ、私の——炎?」

「おっと。それ以上はいけねえぜ?あんまり余計なおしやべりをしていると——」

割り込むようにして〈ディアボロス〉が口を開くと、今度は跳躍して右手の禍々しい爪を振りかざしてきた。どうやら話の続きをさせたくないらしい。今度狙ったのはシユン。だが、そこはコミヤが割り込んで防ぐ。

「ガキイ!!ばさつとするな!!」

拮抗する二つの力。だが、そこへもう一撃――

「はあああああ!!」

先ほどより強く赤々と滾る炎が〈ディアボロス〉に迫る。直撃――したかにみえたが、盾によって阻まれる。

「おいおいおい。多対一とは卑怯だなあ?」

〈ディアボロス〉はさすがに二人を弾くと、そのまま追撃。上側へと弾かれたコミヤは、空中でバランスをとって難なく着地。対する朱は少しバランスを崩す。

――多対一ではあるが、結果的にコミヤが二人をカバーしながら戦う形になっているため、攻撃時の有利は変わらないがそこからが上手く繋がらない。互いにジリ貧を迫られている状況となっていた。

戦況が動いたのはそのように拳を交えて数回目。互いに疲れが見え初めてきた頃だった。

「……女子供相手だろうが、こんな大勢に苛められちゃあ本気を出すしかないよなあ？」
唐突に口を開いたのは〈ディアボロス〉だった。先ほどとは比べ物にならないほどの不気味なオーラと鉄の匂いに3人は怯む。

「お前、急に何を……」

「まあなかなか頑張ったほうだとは思うが……やはりこのオレには届かない」

〈ディアボロス〉の周囲にさらに赤黒く濁ったナニカが収束する。明らかに異質な雰
囲気を放つそれは、死の香りをはち切れんばかりに纏っていた。

「……ツ!!蒼羽、シユン、早く逃げ……」

いち早くその異常性に気づいたコミヤが叫ぼうとするが、〈ディアボロス〉は当然、そ
れを許すはしかなかった。

「……もう遅い!!」

その一言と同時に、天高く異形と化した腕を振り上げた。

「〈血の宴〉」

〈ディアボロス〉がそのまま腕を振り下ろすと、辺りを漂っていたオーラは一瞬で意思
を持ったかのように飛び回り始める。それは先ほど〈ディアボロス〉が放った血の弾丸
と酷似していたが、決定的な違いは速度と数だった。四方八方から襲い掛かる凶弾は、
たとえどれだけ優れた能力を持つ生物でも一瞬にして動かぬ肉塊にしてしまうだろう。

ーそして、その生物というのは、オーヴァードも例外ではなかった。人間の常識を遥かに上回る速度で飛来するソレは、流石にさばききれるものではない。

避けられなかった。弾けなかった。防げなかった凶弾は、彼らの身体に孔を穿っている。どう見ても致命傷。辺りに飛び散る鮮血は、果たして〈ブラムⅡストーカー〉のものなのか、はたまた傷からあふれ出る赤い液体なのか。

朱の目に映る景色も、既に真つ赤になっていた。身体中から走る激痛のせいで、もはや自分が立っているかも怪しい。駄目だ。今度は赤色さえも映らなくなってきた。意識が朦朧とし、段々と視界も薄暗くなっていく。

ーいやだ。いやだ。

そんな言葉すらもう口からでない。抗おうとする朱の意思とは裏腹に、世界は確実に遠のく。

意識は、深い深い闇の底へと堕ちていった。

シーン6—3 「蒼炎」

そこには、何も無かった。

比喩では無い。本当に何も無いのだ。どこまでも続く、白という名の無。そんな美しいほど何も無い世界に、一つの亀裂が入った。そこから流れてきた異物は、この世界の一角に鎮座した。〈レネゲイド〉。人はそう呼ぶ。

それは意思を持っていた。この場を自分一色で染めようと思った。何も無い世界なのだから、塗り替えるのは簡単なはずだった。

——ただ、たった一つだけ、邪魔をしてくる奴がいた。

そいつは、元々この世界の主だったのだろう。こんな何も無い世界の、ちつぽけな主だったのだろう。そのくせして、そいつは中々許してくれなかった。

「ねえ、どうしてあなたはこんなところにいるの？」

そいつは問う。そんな事考えた事も無かった。ただ世界を塗り替えればそれでいい。理由なんていらなかった。

「ここは私の世界だから。あなたの場所じゃないんだけどな」

そんなこと知ったことではない。こんな何も無いところが誰のものだろうと関係は

ないだろう。そもそも――

「再び周囲に気を向けると、今まで何もなかったはずの空間に、沢山のものが浮かんでいた。」

「気づかなかったのではない。それは、ヘレネゲイドが見ようとしなかっただけのもの。なににせ、なんの関係もないのだから。」

「私はね、私のもなの。他の誰にだって蝕まれやしない。――まあ、こうしてあなたがいる訳なんだけど」

「そいつは、浮かんだ沢山のを懐かしそうに眺めていた。それはそいつの思い出だった。懐かしそうに眺めてはいたが、楽しそうではなかった。」

「中身をよくみれば、そいつの小さかった時であろう姿の少女が泣いていた。部屋のドアを背中にして蹲っている。外側では、男が女を殴っていた。少女はとても悲しそうだった。」

「しばらく、そんな思い出が続いた。いつだって少女は悲しそうで、酷く辛そうだった。」

「こんな思い出、誰が欲しいがるだろうか？誰が大切にしているだろうか？これごと自分ならば塗り替えられる。ヘレネゲイドは主張する。」

「ううん。でもね」

「そいつは首を横に振ると、もう一度上を見上げる。辛そうに思い出の中に、一つだけ」

明るい色があつた。

それは年端もいかない少年だった。閉ざした彼女のドアを、何回も叩いていた。少女は少年を見上げると、抱きつき、声をあげて泣いた。

そこからだった。少女の世界に色がつき始めた。度々辛い思い出は混じるものの、そこには確かな明るい色彩があつた。

「ね？」

そいつは嬉しそうにはにかんだ。何が何だかよく分からなかったが、そいつは満足しているようだった。

「ねえー私に、力を貸してくれない？」

そいつは図々しく言ってきた。そんなことしなくても、自分が世界を塗り替えればそれで力はいくらでも手に入る。いくらでも使える。

「ーそれじゃダメなんだ。それじゃ、誰かを守れないから」

ー誰かを、守る。また訳の分からない概念だった。でもそいつは、大真面目に言っているようだった。何を言っても、聞かなかつた。

「あなたは、この世界を塗り替えていくんでしょ？なら、そのかわりーじゃ、ダメかな？」

世界を塗り替える対価。相変わらずそいつのいうことには納得できなかつたが、邪魔

をしないと約束してくれるならば安いものだとも思った。

「うーん。私はどうなつてもいいから、まずはみんなを守りたいから。力を使ってあなたに蝕まれたとしても構わない」

それなら、こつちにも文句は無かった。別に力を貸すだけなら対したことじゃない。「ありがとう」

そいつは口の端を少しだけあげた。なぜだか、悪い気持ちはしなかった。ならば力を与えよう。自分が渡せる力は二つだけ。どちらを選ぶ？

空間に、燃え盛る赤い玉と冷たく透き通る青い玉が現れる。

「うーん。私はねー」

そいつは暫く考えると、やがて答えを言った。その答えは二択のどちらでもなかった。少し、欲張りな答えだった。

「じゃあ、私はそろそろ行かなきゃいけないから。ここから出るためにも、あなたの力があるんでしょ？」

そいつの言うことは正解だった。そいつがいても世界の侵食が進まないの、居なくなつてもらえるのはいいことだ。

そいつを出してやることにした。この世界から消える間際にも、そいつははにかみながら消えていった。口が動いていたようだったが、うまく聞こえなかった。

また、退屈になる。

——いや、せつかく力を貸すんだからその行く末を見届けてやろう。世界を完全に塗り替えるのも、ほどほどに。どうせ理由もわからない目的だ。急がなくなつていいだろう。

退屈を潰す方法を考えはじめると、悪くない気持ちになつた。

世界の色はほんの少しだけ、蒼色に染まっていた。

◇

——身体が、動かない。意識もあんまりおぼつかない。鈍い痛みが全身を奔っているようだったが、幸か不幸か意識がはつきりしないおかげで苦痛はそこまで感じなかつ

た。

客観的に見て相当ヤバイ状況なのだろう。そろそろ自分は死ぬのだろうか。身体がどンドン重くなっている気がする。感覚すらないのに、そのことだけはなぜか分かった。

ーだというのに、その瞬間はいつまでたつても訪れなかった。それどころか、先ほどとは間逆の感覚すら感じ始めている。血液や、そういう失ってしまったものの隙間をナニカが埋めていつている感覚があった。意識が段々と死の淵から戻りつつある。身体が、動く。

まず最初に瞼を開けると、見覚えのある景色が広がっていた。何かを激しく打ち付けるような音が聞こえてくる。身体の痛みはいつの間にかひいていた。口の中に広がった鉄の味はまだ感じる。鼻腔をくすぐるすえた香り。

ーようやく、状況を思い出した。戦闘は依然、継続中だ。

白髪の少女がオールバックのメガネと戦っている。コミヤ。早く助けに行かなければ。

身体を動かす。動くかどうか少し心配だったが、思いのほか軽々と持ち上がった。手を開いたり閉じたりしてしてみる。違和感はない。それどころか、力が湧き上がってくるような感覚さえある。これならー

「コミヤ!!」

〈ディアボロス〉から飛びのき、蒼羽の呼びかけにコミヤは答えた。顔は依然〈ディアボロス〉のほうを向いたままだったが、その声には安堵の響きがあった。

「蒼羽? 目覚めたのか?!」

「うん。大丈夫。でも私たち、やられたはずじゃー」

「オーヴァードは死なない。皮肉なことに、〈レネゲイド〉に完全に蝕まれるまではな。ーそんなことより話は後だ。戦えるか?」

蒼羽ははつきりと首を縦に振った。それを見たコミヤも口の端をにやつとあげる。

「おいガキ!!」

「なんだコミヤ」

「連携を立て直す。コイツと私で前衛を張るからお前は支援だけぶつ放してろ。いいな?」

「了解」

シユンはコミヤの言葉に二つ返事でうなずくと、周囲を飛び回っていた魔眼を収束させた。

その様子を見た〈ディアボロス〉が口を挟む。

「……ほう。こんどは何をするのか知らねえが、一度負けた連中が何回束になっても同

「じい」とー」

「うるせえ！」

「なっ……」

「いいか、よく見ておけ〈ディアボロス〉。僕のシンドローム、〈バロール〉の本当の強さを!!」

シユンはそう叫ぶと魔眼を操り、一斉に〈ディアボロス〉へと突撃させた。

「ふん。そんな直線的な攻撃——」

〈ディアボロス〉はそう呟きながら〈ハイジスの盾〉を構える。一直線に突撃していた魔眼たちはその盾にあえなく弾かれ——ない。

「〈死神の瞳〉!!」

その声と同時に、魔眼は〈ディアボロス〉の腕にまとわりつく。そしてソレは無理やり体内に侵入し、異形の瞳となつて〈ディアボロス〉の腕に表れる。腕に瞳が生えた、という形でしか形容しようのないそれは、殺意をむき出しにして宿主の隙を伺っていた。

「……な、なんだこれは?! 気色の悪い——」

「今に分かるさ。——蒼羽!! 出番だ!!」

シユンは大声でその名を叫んだ。蒼羽は今一度深くうなずくと、己の内の〈レネゲイド〉と対話するために瞠目する。

(約束したんだからーその力、私に委ねなさい!!)

蒼羽は右腕に意識を集中させる。相手を焼き尽くす業火でもない。弱弱しく滾る灯火でもない。蒼羽の思い描く、蒼羽のための、ヒーローになるための、蒼羽だけの炎を。「はああああああああ!!!」

蒼羽は咆哮する。守らなければならぬ日々を。今度こそ守りぬくと誓った人々を。ーそれに、彼を思いながら。

高まるエネルギー。生命と決意に満ちた純粹なる意思の力。

ーそして、ついにそれは形を成した。透き通るような澄んだ蒼色の炎。世界を守るための新たな剣。彼女の右腕には、そんな蒼炎を宿した剣が握られていた。

「これでー」

蒼羽の脳内には自分が使える力とやらなければならぬことが次々と浮かんでいた。普段の彼女ならばありえないことだが、今この瞬間、彼女はそれを処理し、把握していた。〈コンセントレイト〉〈結合粉碎〉〈氷炎の剣〉ーさまざまワードが頭の中で浮かび、消えていく。

〈ディアボロス〉はそんな蒼羽の変化に気づいたのか、少し眉をひそめる。

「ー先ほどよりも力が増しているようだが、その程度ではー」

蒼羽はそんな〈ディアボロス〉の言葉まで両断するように、握り締めた〈炎の刃〉を

振りかぶる。

「…………ツ！」

「いつけえええええ!!!」

盾を構える〈ディアボロス〉と、それすらも叩ききろうと斬撃をくりだそうとする蒼羽。〈ヘージスの盾〉は確かに堅牢だったが、〈死神の瞳〉と蒼羽の蒼炎のあわせ技には流石に無力だった。

まずは蒼く輝く剣閃が〈ヘージスの盾〉に衝突した。それと同時に〈ディアボロス〉の腕に生えていた〈死神の瞳〉が破裂し、宿主に甚大なダメージを与える。よろける〈ディアボロス〉。そしてその隙を蒼羽が見逃すはずがない。

よろめき、盾が身体から弾かれて無防備になった場所に、蒼羽の剣が迫る。炎の力で加速され、威力を上乗せされた斬撃は、そのまま〈ディアボロス〉の身体に傷をつける。さらに蒼羽の剣は止まらない。炎で無理やりバックブラストを生成し、剣を振りぬいた後の慣性を相殺することによって常識ではありえない速度での剣撃を可能としていた。続けざまの斬撃。

斬、斬、斬、斬、斬、斬、斬、斬、斬、斬

「グアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

やがて〈ディアボロス〉は絶叫しながら後ろへ吹っ飛んだ。常人ならば当然死んでいくはずのダメージジのだが、こちらと同じように相手もオーヴァード。回復力と耐久力は尋常ではない。

「クツ……やはりこの力——もつたいないぞ。今ならまだ間に合う。FHこっちに来るんだ……!!」

往生際が悪く蒼羽を勧誘する〈ディアボロス〉に、蒼羽はきつぱりと答える。

「——悪いけどそれはできない。私はUGNこっちで戦うって決めたんだ!!」

大声で決意を述べる蒼羽に、今度こそ観念したように〈ディアボロス〉は言った。

「惜しいねえ……なら、脅威の芽は今のうちに摘んどかないとなあ!!」

〈ディアボロス〉は再び立ち上がった。瞳の奥には未だ不屈の眼光を宿してはいたが、当然ながら完全復活とはいかず、先ほどよりは弱っていた。

「おい〈ディアボロス〉、さっきまであんなに調子に乗ってたのにそのザマか？やはり大したことはないな」

そんなボロボロにやられた〈ディアボロス〉をコミヤは煽る。その真意は、本当に嘲笑の気持ちが入っていたのが半分。もう半分は力を全開で振るう蒼羽の事を心配しての挑発だった。

（蒼羽のやつ、いつの間にか力を使いこなして——まあ、あのガキの見込みも正しかつ

たつてことか。私もやらないとな)

「まだまだこんなんで勝った気になってんじやねえぞ!!」

戦意を衰えさせず叫ぶ(ディアボロス)。コミヤは一瞥し、全身に力をこめる。

「〈完全獣化〉」

これがコミヤの本当の力。コミヤは常日頃人型で活動しているため、どのようなシンドルームかは判別がし辛い。コミヤのシンドルームは(ヘキュマイラ)。獣の力を行使する力。その力のほとんどを使えることができる形態が、完全なる獣の姿だった。侵食率の上昇もバカにならないため普段なら出し惜しむのだが、今回はそうも言ってもらえなかった。

そして、彼女はその力を行使した。美しい白髪を逆立て、身体が光に包まれる。コミヤが空中で反転すると、その場に現れたのは白銀の狐。日本風というならば、妖狐と云ったところだろうか。口には先ほどまで構えていた剣を咥えている。完全な獣の姿とはなったものの、その秀麗な眉目に宿る知性は消えていなかった。

「えっ?! ええ!!? コミヤ!!!」

後ろのほうで驚いているのは蒼羽。彼女もコミヤの力のことは伝えられていなかった。なので、当然の反応だった。

そんな彼女の様子など知るよしもなく、二人は戦いを続行する。

「ほう……それが本当の力かい。白髪の嬢ちゃん」

「ガルルルル」

「そうかーもう言葉は話せないんだったな……来い!!」

コミヤが化けた妖狐は跳躍し、口に咥えた刀で〈ディアボロス〉に切りかかる。獣ならではの圧倒的な速度と瞬発力。音速の域に届くかと思われたその一閃は、〈ディアボロス〉の身体をあえなく切断し――

ガキン、と、硬いものがぶつかる甲高い音がした。煙が晴れ、二人の姿が顕わになると、そこには盾で刀を受け止める〈ディアボロス〉の姿。そうとうな衝撃だったのだろう。アスファルトには〈ディアボロス〉の立っている場所を中心にして亀裂が入っていた。コミヤの一閃はまさに音速だったが、同じ〈キユマイラ〉同士動きを見切られてしまったのだろうか。野生の勘ともいえる超常的なリアクションで、コミヤの一撃を防いだ。

〈ディアボロス〉はニヤリと笑い、意趣返しをするように口を開く。

「……ぬるい太刀筋だな」

「チツ……!」

コミヤは盛大に舌打ちをすると、お前のせいだといわんばかりに蒼羽の方を睨みつけた。

その視線に気づいた蒼羽は少し肩をすぼめた。せめて送ってやれる声援はないかと考えたところ——

「コミヤー!!がんばれー!!一緒にがんばろー!!」

場にそぐわないほどの能天気な声援。それはそれで腹が立ったコミヤはそつぽをむいて無視する。蒼羽は少しだけしよんぼりした。

そんなやり取りを見ていた〈ディアボロス〉は激昂する。

「……コケにしやがって。お前ら忘れたんじゃねえだろうな?!さっきお前らは、このオレの一撃によってなすすべもなくやられたんだよ!!」

コミヤと距離をとった〈ディアボロス〉は、異形と化している右腕を再び振り上げた。〈死神の瞳〉で受けたダメージも完全に再生している。

「——来るぞ!!」

シユンがそう叫ぶ同時に、〈ディアボロス〉は腕を振り下ろす。先ほどと同じように凝固した血液の棘が縦横無尽に飛び回った。一度受けた攻撃だ。見切れるかとも思ったが、流石にそこまで甘くはない。最初の数発は対処できたものの、背後から、直上から、真下からせまる弾丸はどうしようもなかった。

身体に風穴が開き、激痛がはしるが——今度はなんとか耐え切れそうだった。意識さ

え強く持てば、身体は勝手に再生する。気絶することはない。何発か耐えているうちに、その嵐が止んだ。

さすがにこの技を使うと〈ディアボロス〉も消耗するようで、肩で息をし始めている。特徴であったメガネもヒビが入り、気がつけば地面に転がっていた。

「ハア……ハア……へリザレクト」か。大概面倒だな。オーヴァード相手つてのも」

「その言葉……そっくりそのままお返しするよ。——だけど、今度こそお終いだ」

皮肉にも、ここまでできてようやく両者の意見が一致した瞬間だった。——まるで呪いのようだ——そう語った研究者が居たそうだが、今ならその意味がよくわかる。死ねない呪いというのは、えてして性格の悪いものだ。

「いくぞ……!!」〈死神の瞳〉!!

再びシュンの周囲に魔眼が集まり、〈ディアボロス〉の方へと一直線に飛んでいく。〈ディアボロス〉はすぐにそれが先ほどと同種の攻撃だと見抜き、避けようとして足に力をこめたが——

——ガクッ。

彼の足は動かなかった。否、動けなかったのだ。先ほどから受けたダメージの数々。とくに、コミヤから受けた地面に亀裂が入るほどの衝撃が不味かった。その一撃は彼の足の組織を内部から破壊し、オーヴァードの再生能力でも追いつけないほどのダメージを与えていた。そして生まれる一瞬の隙。そこに大量の眼達が群がる。

結局〈ディアボロス〉がとれた行動は防御のみ。そしてそれはあえなく失敗し、不気味な芽が——いや、眼が再び生える。

〈ディアボロス〉が嫌悪感を示す間もなく、次なる敵は襲い来る。

「蒼羽!! ありったけをぶっつけろ!!!」

「りよーかい!!!」

蒼羽は大声で叫びながら跳躍する。不思議なことに先ほどよりもさらに力は増していった。それが力を使った代償の副産物だとしても、今は——

脳内に浮かぶイメージ。先ほどのような連撃ではなく、より重く、より速い一撃必殺の攻撃。蒼炎は、さらに勢いを増す。

「喰らえー!」

蒼い光の尾。それは彼女の理想の力であり、思いの集大成。叩きつけるのは、幾人もの幸せを奪い、命を粗末にしてきた罪深き男。断罪の一撃が、平穩を守るための一撃が炸裂する。

「いつっつけええええええええええええええええええええええ!!」

今までの全ての思いを乗せて、蒼羽は全力をこめた一撃を放った。

両手に握り締めた蒼炎の剣を思いつきり振りぬき、〈ディアボロス〉の身体を今度こそ両断する。しかし剣は貪欲だった。斬撃だけでは飽き足らず、衝突した瞬間に解き放たれた蒼炎は、両断された状態のままの〈ディアボロス〉を遥か彼方へと吹き飛ばす。

「ッ、ッの力は——グワアアアアアアアアアアア!!」

その様子は、偶然かそれともなんらかの意思の介入か。バットを振りぬくようにして放たれた一撃を反映するかの如く、さながらホームランのように吹き飛んでいった。

蒼い炎に焼かれながら吹き飛ぶ〈ディアボロス〉はビルの壁面に衝突する。爆音とともにビルにクレーターを作るその様は、誰の目からみても無事ではないのは明らかだった。

◇

ーパラパラと、おちたコンクリートが音を立てる。〈ディアボロス〉の絶叫の直後、辺りは不気味なほどの静寂に包まれた。白煙が立ちこめ、視界がほとんど閉ざされた状

態だ。

しばらくして煙も薄くなった頃、遠くの方でうごめく影が見えた。方向は〈ディアボロス〉が吹き飛んでいった方。十中八九本人だろう。

ゆらりと立ち上がる影。ただ、動作からも満身創痍なのが見て取れる。霧が晴れると、血反吐を吐いてよろめいているのがより鮮明にわかった。

そのはずなのに、春日は何故か不敵な笑みを浮かべている。そして、放つ一言。それは蒼羽らにとつての呪詛であり、春日らにとつての切り札だった。

「……見たかよーやっぱり化け物だっただろう？」

素晴らしい放ちながら、春日が見やった先。それは夕焼けの差し込む黄昏時の路地。誰も居なかつたはずのそこにみえる。一つの人影。

それを目にして、蒼羽の顔は驚愕に歪むことになる。そう、彼女が見てしまったもの。それは――

「し、森藤――？」

ミドルフェイズ

シーン7 「歪み」

時間は少し遡る。

それは、まだ日も沈みきらない昼下がりの出来事だった。たった一人でアスファルトの上を踏みしめて歩いている。未だに昨日起きたことが信じられないが、こうして世間が騒ぎ立っているのだから事実なのだろう。

彼な名前は森藤涯。世界の裏側を知らぬ人間の一人の、はずだった。そう、彼と出会いさえしなければ。

日差しの中に隠れた路地裏で、メガネをかけた痩せ型の男が佇んでいた。その男はこちらをみやると、近くに寄ってくる。当然面識もないので無視しようとしたが――

「君――森藤涯君、だよな？」

「……そうだけど。おっさん誰だよ」

「いや。俺はしががないライターだね。こないだの事件について取材したいんだ」

森藤は少し不振に思い、そそくさと肩を押しつけていこうとする。

「悪いが、怪しい奴には付いていくなかって教えられてんだ。――じゃあなおっさん」

目すら合わせずにそこから立ち去る。だが、背中から先ほどの怪しい男の声が投げかけられてきた。

「お前も大変だなあ……！ーあんな友達を持って」

誰のことを指しているかは分からなかったが、少し、カチンときた。

「……なにい？」

振り返って再び男の方をみやると、その手には一枚の写真が握られていた。目を凝らしてみれば、蒼羽に似た人物が写っているようだった。ーが、身体はなぜか異形と化している。

「こんなのがお友達じゃ夜も眠れんだろう？」

男は下卑た笑みで森藤に問いかける。森藤もさすがにこれには少し動揺したようだった。

「これがアイツだって言うのかよ？ーコラだろ、これ」

森藤の鋭い発言に一瞬驚く男。ただ、話を逸らすのはお手の物だった。

「ー大体おかしいと思わないか？あんなぬにあつて無傷で即退院？シヨツピングモー
ルは全壊なの？」

「それは、運が良かったんじゃないの？周りのものが壁になったとかー」

「おいおいおい。他人事じゃないんだぜ……？」

その男の一言に、森藤は眉をひそめた。

「……………え？」

そんな森藤の様子を見て、男は口の端を吊り上げながらゆつくりと言った。

「無傷で帰ってきたのは——お前もだろう？」

事の核心。そしてその反応をみた男はさらに畳み掛ける。

「俺たちがお前を見つけられたのは運が良かった。——教えてやる。力の使い方を」

「でも——」

後ずさる森藤。ただ、そこで逃がすような彼ではない。

「俺はいいんだぜ？——お前の身近な奴がミンチになったとしても」

静寂。まだ日は天高くあるというのに、辺りの雰囲気は不穏一色。そして遂に、ゆつくりと影は片方の影ににじり寄る。

「——いい子だ。まずは見に行こうじゃねえか。奴の本性を」

影はうなずくと、日の光も陰ってしまうような路地へと歩み、消えていった。その場に残されたのは、不気味なほどの静けさだけだった。

◇

「えー？」

灼熱の炎を纏い、〈ディアボロス〉もとい、春日恭二を吹き飛ばした蒼羽。だが、それを歓喜する間もない。彼女の元には、再び絶望が訪れる。

夕陽の射し込む路地裏に、佇む一つの影。その正体は森藤涯。蒼羽の何者にも変えがたい大切な人間であり、この姿を見られたくもない人間だった。

大きく見開き、揺れる彼の瞳。衝撃のあまり言葉は出ず、ただ、立ち尽くすのみ。そしてそれは蒼羽も同じだ。

しばらくの間。嫌な静寂が辺りを支配する。

ー それをようやく打ち破ったのは、コミヤだった。

(逃げられると厄介か。なら、捕まえる……！)

獣化を保ったまま、森藤の方へ跳躍。一瞬何が起こったのかすらも分からないほどに、疾く、正確な動きだった。白い流星が彼の元へと迫る。

「ッ……！」

森藤はその跳躍が自分を狙ったものだと気付き、危険を感じ身を躲そうとするが、咄

嗟の状況。あえなくコミヤの変化した妖狐に首ごと啜えられてしまう。

首ごと——とは言つても、そこはコミヤである。絶妙な距離感で森藤の服の襟のみを捉え、外傷はない。

目の前で起こったあまりの状況に、呆然とする蒼羽。コミヤを止めようともするが、彼と落ち着いて話をしたいのも確か。中々身体が動かない。

そして何より、蒼羽が震えている理由。

それは、彼が奇しくもコミヤと同じように獣のような牙を剥き出し、周囲を威嚇していたからだ。日常の象徴であった彼も、まさか——

その瞬間だった。森藤は、もう一度毛を逆立てると身体を振り切る。コミヤは咄嗟に動こうとするが、あえなく普遍的な繊維で編まれた服は破れ、そのまま森藤の戒めは解かれてしまった。

「させるかっ!!!」

シユンは魔眼を再び展開。全体に張り巡らせ、逃亡を阻止しようとする。

だが、彼はそれすら振り払うように人ならざる動きと俊敏さでその場から逃げ出した。ビルの合間を縫い、さながらパルクールのように頭上を駆け、夕闇の向こうに消えていく。ビルの壁面には、獣の爪を立てたような痕が残っていた。

「し、森藤——」

蒼羽は膝から崩れ落ちた。何より大切な彼が、自分に牙を剥き、彼方へと消えていった。はじめて彼から拒絶されたような気がして――彼が恐ろしくなり、自分もまた、彼から恐れられているのだと感じた。彼の目の前で力を行使し、戦いに没頭していた自分を見られたという事実が辛かった。

彼女の、最後の縋る筈だった物が自分から離れていく。その事にはもう、耐えられない。涙が溢れ出し、嗚咽が止まらなかった。

そんな蒼羽の様子を見てか、春日は愉悦の笑みを浮かべる。死にかけの筈だったが、瞳は爛々と光っていた。

「あーあーあ。可哀想に……いんな善良な一般市民を――」

コミヤもシユンも春日を睨みつける。だが、春日はそんなことは意に介さなかった。

「――まあ、いい。その嬢ちゃんのお誘いが終わった時点で、俺の役目は終わりだ。こっちはあのダイヤの原石を逃がすわけにはいかないからな」

コミヤは今にでも飛びかかろうとする勢いだった。だが、春日の方が一瞬速い。

「それじゃあ、あばよ!!」

そう誇らしげに叫ぶと――どこにそんな力が残っていたのか――身体を起き上がり、路地の向こうへと消えていく。一瞬にして気配は消え去り、戦いの傷跡のみがその場に陰々と残っている。

「チツ……」

コミヤが舌打ちをする。だが、それも空虚に響くのみ。その場にあるのは、傷だらけのブロック塀と壁面。それに、彼の服だった物の切れ端だけ。蒼羽の行き場のない号哭を受け止める者も、受け止められる者ももう、居なかった。

シーン8 「作戦準備」

「クソツ……！」

コミヤはソファにドカッと腰を掛け、その足を乱雑にテーブルの上へと投げ出した。表情から——というか、後ろ姿だけで殺気立っているのが良く分かる。

森藤を逃がした後、一旦東京タワー内のN市支部に戻ったコミヤ達一行。しかし、当然いい気持ちのする帰還ではなかった。

敗走。嫌でもその単語が頭にチラつく。森藤涯。彼をみすみすと逃がしてしまい、結果的になにも為せなかつた事実事態がどうしても許せないのだ。

そんなコミヤの横で俯いている蒼羽とシユン。彼らの胸にも同じくなんともいえない感情が渦巻いていた。

重苦しい雰囲気の中、蒼羽がはじめに口を開いた。

「あの……シユン君？」

「なんだい？」

「森藤の姿を見て色々思ったんだけど……あれっていわゆる、私みたいな力を得てしまった——ってことなのかな？」

「まあ、そうだろうね」

「——だよ。でも、あんな森藤初めて見たし……」

蒼羽は俯いた。彼の様相を反芻し、ただただ考える。

「元に戻す方法って、あったりするのかな？」

「残念だけど。オーヴァードが元の人間に戻った事例は、僕の知る限りでは一つも無い」

「そう……だよ」

一縷の望み。だが、それも即座に碎かれる。無常にも彼は有識者だ。どうしようもない。それでも。

「——どうやったら助けられるかな？」

シユンを真つ直ぐに見つめる蒼羽。澄んだ瞳には曇りは一点も無い。それに応えるようにシユンも言葉を返した。

「彼を元に戻すことはできないが——僕やコミヤをみてもらえれば分かるように、こうして普通に暮らすことだってできる。だから後は気持ちの問題だ」

そういいながらシユンはコミヤを、そして窓の向こうを一瞥する。

「さつきは彼も、ああいう風に逃げ出してしまった。僕には止められなかった。だが、君なら——話せば、分かってくれるんじゃないか？」

自分よりも背も年齢も下の少年の言葉。だが、その言葉は確かに重みをもっていた。

私なら——そんなこと、できるのだろうか？もう一度拒絶されてしまったら？

「でも、私は力を使つたところを見せてしまったから——」

言い訳が口から溢れてくる。こうやってまた、自分には何もできないのだろうか。

「私が行つたら、また森藤は怯えちゃうんじゃないかって——」

もううんざりだった。結局こんなのばっかじゃないか。

うじうじするのはもう止めにようって思ったはずだ。ヒーローに、なるんだろう？

「んー!!!しつかりしろ蒼羽!!!」

自分で自分の言葉を遮るように、自分の頬をペシペシと叩く。気合が足りてない。

「森藤と私は友達だから、ちゃんと話し合ったらわかってくれるし、気持ちも変わると思

う!!!多分!!!」

息を大きく吸い込んだ。もう一度シユンの目を真つ直ぐ見据える。

「私は、森藤を守るためにも変わらずついていくよ」

シユンはうなずいた。

「——だから、今後どうするかを話し合いたいな」

揺るがない決意。迷いはなかった。

「君は強いな……」

そんな風にシユンはボソツと独り言つと、椅子から立ち上がった。

「よし。じゃあそうと決まったら作戦会議だ」

「うん！……あつ、コミヤもちゃんと参加してね！」

唐突に——というか自然な流れのはずなのだが、一人悪態を吐き続けていたコミヤに会話が飛ぶ。当然のように苛立っていたので、つつけんどんに返事をした。

「私もなのか？ 関係ないだろう」

「えー！ 仲間じゃん！ 一緒に頑張ろうよ！！」

「なっ……仲間——」

狼狽するコミヤに、シユンが追い討ちをかける。

「はい支部長命令です。参加してくださいーい」

「——はいはい」

不満そうにも、しぶしぶうなづくコミヤ。なんだかんだ言つて、コミヤもこのことは嫌いではないのだ。

必要な面子も揃ったので、シユンが早速話をきりだした。

「——さて、まずは森藤を追いかけるのが先決だけど……情報が少なすぎるからまずはそこからだね」

そういうと、デスクの上に置いてあったメモとペンをとり、見た目相応の若干崩れた字で文字を書きだした。

・蒼羽の友人について

・黒幕について

そんなことが箇条書きで書いてある。

「多分突き詰めるとこの二点が今必要な情報になると思う。蒼羽の友人……って
いうのは、もちろん彼、森藤涯のことだね。行方とかを探ることになると思う。そして、
もう一つの方なんだけど——」

「黒幕、か」

コミヤが口を挟んだ。

「そう。あの〈ディアポロス〉の様子から察するに彼に指示を出してる人間が居るはず
だ。おそらくそいつが、今回の事件の黒幕になると思う」

「なるほど。役割分担は？森藤のことなら私が調べるけど……UGNでも手を焼
いてるんでしょ？」

「ああ、それなら僕がなんとかするよ。データベースとかにも探りを入れてみる
し……奥の手もある」

「——そっか。わかった。コミヤは？」

「……好きにしてろ」

コミヤはそっぽを向いた。

「な………」

「とりあえずほつといてやって。そのうち機嫌も直るから」

「はい」

すこし残念そうにする蒼羽。この中で一番冷静なのがシユンという絵面もおもしろい。

「とりあえず行動開始としようか。コミヤは別件を任せるから蒼羽は気にせず行つてきてくれ」

「りよーかい」

蒼羽は頷くと、扉を背にして出て行つた。残つたのはコミヤとシユンの二人だ。

「いいのか？蒼羽を単独で動かして」

「うん。……それに、好きにしろつて言つたのはコミヤだろ？」

シユンはそういうながら、デスクに座り、パソコンを立ち上げる。

「なつ。それは——」

その横でコミヤがうろたえると、シユンは少し微笑んだ。

「ハハッ。冗談だよ。蒼羽なら安心——というか、多分敵の狙いは蒼羽じゃないから、危険は無いと思う」

「………ほうっ？」

「ああ。なんとなくだけど、敵の本当の狙いは彼、森藤のほうだと思うんだ。根拠は——
まあ、直にわかるよ」

「……………」

「コミヤは少し唸ると、再び腕を組み目を瞑った。シユンはノイマン。思考では完全に常人の域を超えているので、度々このように推理において置いていかれることがある。もうなれっこなので何も言わないのだが、どれだけ賢くてもガワは小学生だ。コミヤのプライド的には複雑な気分である。」

「ああ、そうだ。コミヤに頼みたいことなんだけど……………」
「ゲツ」

「そこで寝てて言い訳ないだろ。とりあえず物資の買出しを頼む」
「マジで言ってるのか？ウチの支部の予算って確か——」

「コミヤが言っただけじゃないことを言おうとしたので、当然シユンは遮るように言葉を被せる。」

「あんまり働かないと、日本支部長に——」

「ああ分かったよ！行ってくればいいんだろ?!行ってくれば!!!」

「コミヤは逃げるように支部の扉を乱暴に開けて出て行った。反動で勢いよく閉じたドアが景気よく音を立てる。」

「ハハハ……」

今のはコミヤを動かすときにちよくちよく使う常套句である。普段誰に対しても傍若無人な態度をとるコミヤだが、霧谷雄吾——またの名をリヴァイアサン、あるいはU GN日本史部長——には別である。理由は割愛するが、彼はコミヤの大恩人であり、特別な感情を抱いている。

(さあ、仕事をしようか。時間ももう無い)

シユンはそう言うのと胸ポケットのココアシガレットを出し、口に啜えた。

◇

「ただいまー!」

その言葉と同時に扉が開いた。快活そうなこの声の主は——間違はなく蒼羽だ。

「おかえり。どう? 成果はあったかい?」

パソコンに向かって座っていたシユンが顔を上げた。手元に置いたオレンジジュースの水面が静かに揺れている。

「うん! それなりに!! ついでに怪我用のガーゼとかも買ってきたよ」

「おお、ありがとう」

シユンが鷹揚にうなづくくと、再び事務所の扉が開いた。先ほどよりかなり乱雑だ。

「おい神宮寺。どういうことだ？ 予算下りなかったぞ」

「だよねえ……お疲れ様」

コミヤは先ほどよりも苛立っているようだった。

「だよねえ……じゃない！ お前支部長だろう?! どうかにならないのか?!」

蒼羽が口を挟んだ。

「え？ なに？ どうかしたの？」

シユンはなんとも言えない表情で目を逸らした。

「いや、なんでもないよ。なんでもないんだ。なあ、コミヤ」

「ああ。ウチの支部は死ぬほど貧乏だからな。どうやら医療器具もまともに買えないらしい。本当にこれだからUGNは——」

「はいコミヤさん失言はやめましょーねー」

「チツ……」

コミヤは例によって例の如く舌打ちをすると、そっぽをむいた。

「——さて。時間も無いので情報の共有からいこうか」

ようやくシユンは椅子から立ち上がり、中央の机へとやってきた。

「どうしようか。とりあえず——そうだね。蒼羽からでいいかい？」

シユンの言葉を受けて、蒼羽は真っ直ぐにうなづく。

「おっけー。私は森藤について調べてきたんだけど……そんなに対したことじゃないけど、一応。オーヴァードに覚醒する可能性があつて、そのFH？つてのに狙われてる——らしいよ。まあ、分かりきつたことだけど。それだけ」

「ありがとう蒼羽。まあ憶測が確証に変わったくらいだけど、情報が多いに越したことはない。さて、次は僕だね」

シユンは特になんの資料をみることもなく、すらすらと言葉を紡いだ。

「じゃあ、一番大事な今回の事件の黒幕だけど——パラケルススっていうFHエージェントの仕業っぽいんだ。結構陰湿なやつらしくて、裏から春日とかを使って色々手を回してたらしい。蒼羽には言つても分からないかもしれないけど、賢者の石っていう特別な結晶が目当てらしいね。だから、森藤が狙われた理由は恐らくその——」

蒼羽が神妙な顔で口を挟む。

「——賢者の石？」

シユンは頷いた。

「ああ。その鍵を彼が握つてるっぽいんだ。それが渡るのはUGN側としてもいろいろ不味くてね。なんとしても奪還しなくちゃならない」

「分かった」

蒼羽が応えると、コミヤが思い出したように口を開いた。

「——で、肝心の敵の場所は分かっているのか？」

「もちろん。町外れに潰れたボーリング場があったらどう？ その地下らしい」

「了解」

シユンは二人とも他に異論が無いのを認めると、先ほどよりもさらに真面目な顔で話した。

「——と、いうわけで。いまから僕たちはそこに向かう。森藤を取り戻し、やつらの作戦を食い止めるためだ。コミヤはいいと思うけど——蒼羽、本当に大丈夫かい？ この先は間違いなく戦闘になる。覚悟がまだきま——」

「大丈夫。覚悟はできてるよ。私が、森藤を助けるんだ」

シユンはその言葉を受けて目を丸くし、瞠目した。

（蒼羽。君は本当に——）

「……………ああ、そうだね。じゃあ、行こうか」

「うん！」

クライマックスフェイズ

シーン9—1 「白衣の悪」

そこは、陰気な雰囲気が漂う廃屋の地下だった。かつて様々な人々が楽しんだであろう娯楽の残骸が、もの侘しく残っている。

そこに立ち入る3つ人影。そして、ソレを辟易するように待ち構えていたのが、△ディアボロス。こと春日恭二、そして森藤涯だった。

「おやおや、ここにたどり着くとは……」

春日は相変わらず人を小馬鹿にしたような態度で口を開いた。そして、それにシユンが意趣返しをするが如く憎まれ口を叩く。

「このアジト、変えたほうがいいんじゃないの？丸見えだったよ。UGN支部からもね」「フツ……なるほどなるほど。引越しても、検討しておくかな？」

最上級にいやみつたらしい口調で春日も返答した。UGNに比較すれば予算は潤沢なのである。

そんなやりとりの応酬もつかの間、背後にいる森藤の異変に気づいた蒼羽が口をひらいた。

「……森藤？」

その様子は、もつとも親しい親友が来た、という安堵の表情でもなく、得体のしれない男に監禁されている、という不安の表情でもなかった。

敵意だ。その目には敵意と恐れが宿っていた。そしてその視線は、あろうことか蒼羽の方へと向かっている。

「……。」

「ね、ねえ……森藤？私だよ、わた——」

「……名前を、呼ぶな」

苦悶の表情を浮かべながら、森藤は吐き捨てた。

「ッ……！」

蒼羽は絶句した。改めて、明確な拒絶を受けた、というシヨックも大きかったのだろう。だが今度は泣き出すことはせず、最愛の親友への視線を逸らしはしない。

「絶対、助けるから。森藤。……そこにいる化け物にだって、負けないから」

そういつて蒼羽は春日の方を見遣った。

「おいおい、化け物はお前もだろうか？」

春日は反論したが、蒼羽も負けじと言い返す。

「……いいや、違う。化け物にだって種類はあるよ。ただ……間違いな

くお前は、悪い化け物だ。だから……」

見かねたコミヤが口を挟んだ。かなり苛立っているのか、まくし立てるような口調だった。

「あー落ち着け。状況をみるにお前の友人はどうやらあちら側につくようだ。……つまりは無理やりこちら側に引きこまないといけないってことも分かる訳だ。いいか？ポジティブ女？」

「いや、でも無理やりこつち側にひきずり込んで、心の傷は消えないし、森藤とそんな関係なんてやなの。だからまずは慎重に説得して……」

「その慎重な説得とやらをするためには一旦こちら側つれてきてからでもいいだろう?!」

「……でもさつきもそれしようとして逃げられたじゃん！」

「今度は捕まえる。足の一本でも二本でもぶった切れればいい」

「あの……私の友達だからやめてもらってもいいかな……」

蒼羽がドン引きといった風に返答をした。が、コミヤの表情を見て発言の意図を理解したらしい。なるほど。コミヤも焦っているのだ。

「大丈夫だよ。なんとかなる。なんとかなるから！頑張ろう？コミヤ」

コミヤはその言葉を聞いてため息をついたあと、そっぽを向いた。

そんな様子を眺めていた森藤は、苛立ちも隠さずに言葉を吐いた。

「俺は、お前達みたいにはならない」

「……………ほう？それはどういう意味だい？」

それに答えたのはシユンだった。

「理性をなくして暴れまわるなんて、俺は御免だ」

森藤は忌々しげに目の前の三人をみつめた。特に——蒼羽を。

「それって、私のこと……………？」

「ああそうだ。お前——お前達三人だよ」

シユンが口を挟んだ。そうだ。ここを訂正しなければならぬ。FHに一方的な情報植えつけられている——皮肉にもそれはUGNにも当てはまるのだが——状態なのだ。こここの紐は解かなければ鳴らないのだ。

「ちよつとまつてくれ。それは誤解だ」

蒼羽が隣で頷く。

「そうだよ。私達一回死んでるから……………仕方ないことだったんだよ。森藤」

「……………」

森藤は沈黙を貫いた。突き放したような態度。ただ——瞳の奥には少し、恐れ——不安———そういつた、少し別の何かも揺れているような気もする。

シユンは言葉が続けた。

「理性を無くした化け物——か。確かに、そうなってしまふ存在もいる。．．．．だが、ソレに近いのはどちらかという君が立っている方だ。そのままだと君は、君が最も忌み嫌う理性の無い化け物に近づいていく。それは分かっているのかい？」

「ツ．．．．?!？」

森藤はそれが本当なのかと確かめるように、春日の方を振り向いた。だが、春日は我関せずといった調子で首を振る。

「おいおいおい、見ただろう？あんなに俺は苛められてたんだぜ？」

「んなつ．．．．あれはもともとそっちから仕掛けてきて——」

「はて?..」

蒼羽の抗議にも白を切る春日。どうやらこれで通すつもりらしい。それでもなお抗議しようとする蒼羽にコミヤが右手を出して制止した。

「——そうだな。そもそものシヨツピングモールの爆発もそこに立っている男の仕業なんだがなあ」

「そうだよ森藤。私達はあの爆発に巻きこまれたの。忘れちゃったの？」

コミヤも蒼羽を制止はしていたがかなりイライラしているらしく、刀の柄に手がかかっている。

それを見たシユンは流石にまずいと思ったのか、懐に用意してあった資料を取り出して読み上げ始めた。

内容は至ってシンプル。これまで春日恭二という男がしでかしてきた悪事をあらいたざらいあげ連ねるといふものである。ただ、良識ある一般人に対しては十分すぎる不信の種となつただらう。

「え………?」

森藤は再び春日の方を振り返る。それでも春日は白々しく肩をすくめていた。ただ、流石に隠し切れないことは分かっているようで、ソレを認めたと同然の態度ではあつたが。

「………これで分かつたかな、森藤くん。理性を失つた化け物を、むしろ利用している側なんだ。その男は」

森藤は、苦悩するように頭を抱える。

「お、俺は——」

彼を蝕んでいた毒が、ようやく引こうとしていた。彼は良識ある人間で、蒼羽のかけがえの無い親友である。そんな彼の心は確かに、正しい方向へと動こうとしていた。

——だが。

「………まどろっこしいですねえ」

背後の暗闇の奥から、声がした。視線を移すと、それなりの体軀の男が歩いてくるのがわかる。白衣を身にまとい、メガネを掛けた——いかにも研究者といった出で立ちの男。この緊迫した空間に似つかわしくない、余裕を感じさせる足取りで近づいてくる。そして、それはあまりにも一瞬だった。森藤の側へと近寄り、そのまま頭に手を添える。不味い。この場にいる誰もがそう思った。だが、誰かが割り込む間も無く——

「へブレインジャック」

その瞬間、森藤の目の輝きが失われた。彼はそのままそこに立つてはいたが——いや、立っているだけなのである。そこからは先ほどの意思や葛藤といったものは感じられず、ただただヒトの形をした器が立っていた。

「……森藤？」

白衣の男はやれやれといったように肩をすくめて、蒼羽たちのほうへと向き直った。「僕はね——賢者の石さえ手に入ればいいんです。U.G.N.のくだらない友情ごっこには、付き合ってもらえないんですよ」

蒼羽が激高する。

「お前——しゃべり方が気に食わないんだよ!!!出で立ちも!!!森藤に何をした!!!」

「いえいえ、悪いお友達と付き合っただけで欲しくなかったの——少し、大人しくしてもらったんですよ」

「悪い友達……？私と森藤は、小っちゃいころからの友達だし——今も——多分——」

白衣の男は小馬鹿にしたようにため息をついた。

「はあ……友達って言うのはね、お互い利するものなんですよ。利益が無きややつてられないんですよ。幼い頃から一緒に居ただとか——そんなくだらない理由のものではないんですよ」

「くだらないものだなんて——」

「——僕は森藤君を高みに昇らせる。そして森藤君の中の賢者の石が、僕にさらなる知識を与えてくれる」

「賢者の石？それが、森藤の身体の中にあるの……？？」

「そういうことです——」

シユンが考え込んでいたところを、納得したようにうなずき、口を挟んだ。

「その言い草——君が〈パラケルスス〉か」

「ご名答！」

そのパラケルススと呼ばれた男は下卑た笑みをさらに強めて答えた。

シユンはそれに睨みをかえして、蒼羽の方を振り向く。

「——と、いうことらしい蒼羽。そのパラケルススとかいうエージェントが、春日恭二と

手を組んで、君の友人をあんな風にした黒幕ってやつさ」

「……そんなこと、分かっているよ」

「じゃあ、君はどうしたい?」

シユンは蒼羽の顔を覗き込む。

「私は——」

喉が鳴る。

「——あの二人をボツコボコにして、森藤を取り返す」

曇りの無い目で、蒼羽はきつぱりと言い放った。

それを聞いたコミヤがようやくやくかといった様子で——だが、少し嬉しそうに——ニヤツとした。

「フツ。珍しく意見があつたな……私もそう思ってたところだ。コイツらが話し合いで解決させてくれると思つたか?」

コミヤは刀の柄に手をかける。そしてシユンはすこし肩を落として、そしてすぐ目の前の悪に向かつて目を見据えた。

「——じゃあ、話は早いな」

魔眼が辺りに散らばる。臨戦態勢。彼らの日常を取り戻すため——あるいは、彼と彼女の日常を守り抜くため。

「……………怖いですねえ」

パラケルススは相変わらず人を小馬鹿にしたように肩をすくめて呟いた。

「そんな態度とられたら——こちらも抵抗するしかないじゃないですか」

「……………今なら、森藤をこっちに帰してくれたら何もしいよ」

蒼羽が口を挟む。ただ、横の二人は構えを解くつもりはないらしい。

「なあ蒼羽、こいつらが話し合いで解決するような奴らじゃないのは——」

「分かつてるよ。でも、森藤を巻き込むのが心配で——」

不安げに話す蒼羽に、コミヤが少しだけ体から力を抜いて答えた。

「……………そこは任せろ。お前の——友達なんだろう？」

蒼羽が意表を突かれたといったように顔を上げた。

「コミヤ……………」

「うるさい。やるぞ」

「……………うん！」

そんな様子を見ていたパラケルススが、心底呆れたといった様子でため息を吐いた。

「……………しようがないですねえ。頼みましたよ、〈ディアボロス〉」

〈ディアボロス〉は口角をあげる。

「へっ。ここでヤツらを倒さねえと旨味がねえからな。やってやろうじゃねえか」

その返答を聞いたへパラケルススは、再び肩をすくめ——顔にかけたメガネをあげる。

——そして、彼の身体から黒い靄のようなものが吹きだした。

「……?!」

その場に居た全員が硬直する。その瘴気は、閉鎖されたこの空間を視界と共に一瞬にして覆い尽くした。

「こ、これは——」

誰かが呟いただろうか。その瞬間、身体の奥のナニカが——ドクンと、波打った気がした。

化け物が身体を侵蝕していく。それぞれの——それぞれの内なるものとの、戦いが始まる。

シーン9—2「uncontrollable」

気がつくくと、見慣れた白い空間だった。

そこには、「カレ」の姿が。炎を身にまとった、形の無い何か。まさしくそれは、揺らめく蒼羽の心のように——でも、それは似て非なるモノであるということも、分かっていた。

「ここは——どうして? 今、一体何が起こって——」

「君の本音を、聞きにきたのさ」

「へ?」

その言葉は、甘く、とてもとても——やさしかった。その言葉に全てを委ねてしまいたくなるような、そんな声色。

「本当は、辛いんじゃないのかい? 苦しいんじゃないのかい? 友達に突き放されて、今まで住んでた世界から隔絶されて——泣きたいんだろ? 叫びたいんだろ?」

「な、何を言ってる——」

「いや、しらばっくれたって無駄さ。君はかわいそうだ。そして、弱い」

瞬間、真っ白だった世界に、少しずつ影がにじり寄る。頭が割れるように痛い。視界

がぼやけて映る。——いや、違う。ここから見えるのは、私が今見ている景色だ。

最初にここに来て、彼に出会った時と同じように、数々の場面が、モニタのように何もない空間に浮かびあがる。その中の一つに、今、まさに、蒼羽が見ている景色が映しだされていた。

白衣の男は瘴気を放ち、辺りをドス黒く染めている。そして、その向こう側に見えるのが、森藤——瞳からは意思が抜け落ち、空を宿したその姿は、痛々しくさえ感じた。そうだ、私は、彼に拒絶されて、ここまでできた。ここに居るんだ。

「な？ そうだろ？ やっぱりそうなんだよ。かわいそうな蒼羽。お前は報われない運命なんだ。いつからだだったかな？ つい最近の出来事じゃないよな？ お前が、あの時、親父のDVをみて、母親が痛めつけられている姿を見て、動けなかった。全てはそこからだよ。そうなる運命だったのさ。誰もお前を愛したりしない、救ってくれなどしないのさ」
辺りを包む影はより一層暗く、重くなっていた。ついにはその影たちもが嗤いはじめる。

「お前は弱い」

「お前は醜い」

「化け物め」

その中心に立った少女は、その全てに攻め立てられる。

「私は、私は……」

俯いて、立ち尽くす。そんな中で、ダレかが、声をあげる。

「そうだ」

「そうだ」

「そうだ——」

輪唱は、より大きく、より激しく。

——そして、ダレもが静まり返った。途端、中心の揺らめく影が、口を開く。

「ゼンプ、壊しちゃえよ」

「壊せ」

「壊せ」

「壊せ」

「「「壊せ」」」

!!!!!!!

破壊。その言葉が、概念が、空間を支配する。その中で、口を開いていないのは、少女独り。俯いたまま、口を結んでいる。

周りの影達は、唐突に口をつぐんだ。まるで、この空間の主の、最後の伝令を待つように。それさえあれば、この影達は一気に解放たれ、外の世界で力をふるえるだろ

う。

最後だ。少女の言葉が、最後だ。

「私は——私は——」

少女が、顔を上げる。

「私は——」

息をめいっばい吸う。思いは、言葉に。

「私は、蒼羽朱だ!!!——もう誰も殺さない。傷つけない。この私の炎は、誰かの、皆の、森藤の為の炎だ!!!」

蒼羽は、大声で、叫び上げた。

世界が揺れる。黒い影は、霧のように消えていった。景色は、元の色に戻る。

結局、残ったのは、揺らめく「カレ」と、蒼羽のみ。

「——そうか。君はやっぱりそれを選ぶのか。おもしろいね、本当に」

揺らめきは、蒼羽に語りかけた。少し啞然としたような——でも、少しワクワクしたような声で。

「うん。ちよつとしんどいけどさ、私は森藤を助けるつて決めたから」

「アハハ。本当に退屈しないなあ。いいよ。やってみるがいいさ」

その炎は蒼羽を見送る。少女はもう振り返らない。この世界は、彼女の世界。振り返

る必要などない。

（私は迷わないよ。だからまってて、森藤——）

◇

視界は、再び今に戻る。

対峙する二つの勢力。廃れたボウリング場の地下。緊張の糸は、最高潮に張り詰めている。

ようやく空間を覆い尽くしていた黒いもやが晴れる。全員が、己の中の何かと葛藤していた。

最初に口を開いたのはシュンだった。

「蒼羽、コミヤ、無事か？」

「う、うん………なんとか………」

疲労困憊といったような声で、蒼羽が返事をした。外傷は当然無く、無事なようだ。

——だが、コミヤからの返事がない。

「おい、コミヤ——」

シュンがそう言いかけたところで、異変は現れた。コミヤの身体の殆どが、獣のよう

二人が絶叫をした。体内に注入された多大な量の黒いもや。それらは彼らの身体に力を与え、理性を失わせた。〈ディアボロス〉はもちろん、森藤の瞳にも、僅かだが光が灯る。だがそれは、破壊の色。目の前の敵を打ち倒すというだけの意思。そこに、彼の意識は介在していない。

「さあ始めましょう。あなたたちも、ここで終わりですなえ！」

パラケルススが白衣を翻し、二人を操る。その姿は、まさしく悪の親玉。狂気に染まった瞳が、爛々と輝く。

「クツ………応戦を——」

シユンがそう呟いた瞬間、コミヤが〈ディアボロス〉の方へと向かって走りだした。刀に今、まさに手がかかっている。

電光石火。それが戦いの火蓋となっただろう。その一閃で、コミヤと〈ディアボロス〉が衝突する。

「速いな、譲ちゃん。いいぜ………今俺は、最高に気分がいいんだ!!!」

〈ディアボロス〉は、片腕を再び異形と化し、コミヤの剣戟に応戦する。加速する斬撃と打撃。避け、刈り、穿つ。その勝敗は、暫くつきそうに無い。

その最中だ、コミヤが一瞬だけシユンに視線を送る。衝動に駆られた瞳ではなく、理性のある瞳だった。シユンは、意図を汲み取る。

(分かったよ………コミヤ)

口に啞えた野菜スティックを噛み切ると、今度は蒼羽の方へと振り向いた。

「蒼羽!!」

「何?! シュン君?!」

「恐らくこの状況だと、森藤か〈ディアボロス〉の片方を倒さないとあのパラなんとかまで届かない。いや、なんとかならなくは無いけど、間違ひなくあんまりいい手じゃない。コミヤは〈ディアボロス〉に行った。君は森藤くんを頼む!!」

「わ、私森藤を傷つけたくは——」

不安そうに首を振る蒼羽に、シュンはニヤつと笑つて返す。

「当然! 森藤くんを傷つける訳にはいかないさ。だから、君に任せるんだ」

「それってどういう——」

「やり方は、君にしか分からない。でも、君なら取り戻せる、そうだろ?」

少しの間。だが、蒼羽の決意は直に——いや、既に固まっている。

「そう、だね。——行ってくるよ、シュン君!」

そう言うと、蒼羽は駆け出した。少し離れた場所にいる森藤の元へ、大切な人は、すぐ側にいる。あとは、彼女が手を伸ばすだけだ。

——だが、次の瞬間。

「アアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

森藤が身体を震わせながら叫び上げた。苦しみ。聞くに堪えない負の感情を乗せたそれは、辺りを覆い尽くす。そして、彼の身体は、異形と化す。

歪な獣の姿。そこから生えた無数の腕。変幻自在に変化するその肉体と、明確な殺意が宿されたその拳。それはあまりにも醜く、悲しかった。

その腕は、絶叫と共に敵と認定した対象に飛んでいく。おびただしい数の連撃と速さ。それに対処するのは、至難の業だ。

「っ……」

蒼羽は、襲いくる腕を逸らし、かわす。だが、その立体的な軌道には反応が追いつかない。何発か掻い潜ったところで——油断した。そのまま、腹部に拳が直撃する。

「カツ……ハッ……」

血反吐を吐き、地面に転がる蒼羽。身体が思うように動かない。自分の身体が自分のものじゃないみたいだ。傷の治りが遅い、これでは動けない——

——いや、動く。動くんだ。意地でも。父がどうか、過去がどうか、そんなことに囚われて——負けてなどいられない。手を、足を、動かせ。たった一人の、かけがえない大切な人の為に、走るんだ、もう一度。

頭の中で、自分を日常へと近づけていたものが外れる音がした。そうだ、オーヴァー

ドは、そうやって力を得る。まだ死なない。想いの力は無限だ。だから私は、森藤を――

「助けるん……だあああああ!!!」

蒼羽は立ち上がる、必ず、彼の元へ辿りつく為に。朱と蒼の炎の尾は、輝きを増す――

◇

コミヤは、苦戦していた。目の前の男、そして、定期的に飛んでくる腕。これでは不利だ。あまりにも。

意識が朦朧とする。破壊の衝動は、留まる所を知らない。

原因は、あの黒いもやだろう。アレが身体に進入してきて、思い出したくも無い記憶の数々を引っ張りだしてきた。自分を怖れるような――忌むような、冷たい目線。温もりなんて生まれてこの方出会ったことは無い。FHからUGNへ引き取られた私の運命は、そんなものだった。

目の前の男が、異形と化した腕に力を籠めた。この動き――覚えがある。この間の路地で受けた攻撃だ。だが、今回は庇うべき対象も無い。幾ばくかは楽なはずだ。

飛来する血の弾丸。それらは、全てコミヤへと注がれる。啞えた剣でいなし、切り裂き、受け止める。

ああ、また既視感だ——そんなことを覚えながら、攻撃を避け続けた。

似たような訓練をした。ずっと、施設で、一人で。誰も私を見てくれなくて。私は、私じやなくて、538だった。

私が私となったのはいつだろうか？霧谷、という姓をもらった時だろうか？あの少年と——シユンと、出会った時からだろうか。分からない。嵐は、やまない。

弾丸が、腹を貫く。受け止めきれなかった。視界が赤く染まる。だが、動ける。そう教えられた。そう身体がなっているのだ。

立ち上がり、再び剣を構えなおす。勝負は続行だ。再び飛び掛る。

ふと、思った。

——私は今、何の為に戦っているのだろうか——

度々、思うことがある。こんな状態の時は、特に。だが、今回はいつものとは違う、そんな気がする。

視界の片隅に、魔眼が飛んでいく。何処へ向かうのだろうか。こちらでは無い。なら——パラケルススだ。

森藤の可能性は、無い。何故？

私は、何故、森藤の可能性を捨てた？ そう信頼していたからだ。約束したからだ。誰と？

——そうだ。仲間だ。

蒼羽は笑顔で私にこういった。友達だと。仲間だと。あの時は舐めた口を——と思つたが、案外嫌な気持ちにはしなかつた。

(ああそうだ。……嫌な気持ちはしないな。全く)

少しだけ、口元が緩む。戦う理由——今なら、少しだけ見える。私は、戦える。

そんな思考の中で、ようやく外側から飛んできていた拳の嵐が止んだ。何が起きたのかなんて、考えるまでもなかつた。

目の前の男のその向こうで、炎が——蒼羽が、少年に触れる姿が見えた。

想いは、きつと届くさ。だから——

(……行ってこい、ヒーロー)

そして視界の彼方の緋色は、少年を抱きしめた。

シーン9—3「絆」

飛び交う無数の腕。

身体にはいくつか痣ができていた。——あの時を、思い出す。

幼い頃、父に虐げられて、泣いていた母も、似たような痣を作っていたかもしれない。視界が霞む。もうあと少しで手が届くはずなのに、彼はやけに遠く見えた。私は怖いだろうか？目の前の「彼」が。怪物に見えるのだろうか？あの日の父と同じように？

——いいや、違う。

決意した。もう迷わないと。

あの日手を差し伸べてくれた彼に、今度は私が手を伸ばす番なのだ。だからもう迷わない。

私は、まだ、諦めてない。絶対に諦めてなんかやるもんか。

「——森藤？私がわからないの？」

彼の顔がようやく見え見えた途端、私は必死に叫んだ。彼との距離はそこまで遠くない。声は聞こえたはずだ。

だが、彼の表情は依然変わらないまま。獣のように牙をむき出し、その眼光には破壊の色が宿ったままだ。

きつと、こんなものじゃだめだ。

直感的にそう思った。彼の心には、まだ私の言葉は届いていない。もつと違う、もつと別の言葉をかけなければ――

暫く悩んだ――と言っても、時間にしたらほんの数秒だっただろうが――末、私は結局――

「森藤!!」

気がついた時には、彼のことを抱きしめていた。両腕で、ぎゅつと、つつみこむように。……少しかだけ、縋るように。

全身で、彼のがわかった。彼の拍動が、よりダイレクトに伝わってくる。

流石に森藤も驚いたのだろう。少しビクツツとした感触があり、その後、少しかだけ後

ずさった。もちろん、私は離す気など毛頭無かったので、そのまま抱きしめたまま。

少しの間。ほんの少しの時間だっただろうが、その一瞬は永遠のように長く感じられた。

耐え切れなくなって、彼の顔を見上げる。困惑したような顔。そしてその瞬間、閉ざされていた彼の口が開くのが分かった。

「森藤——！」

——だが、それは、期待通りにはいかなかった。彼の口から言の葉は零れない。代わりに襲ったのは、肩口に走る激痛。

「——ッ!!」

彼の牙が、肩を抉る。それは想像を絶する痛みで——直視すれば赤い液体が流れ落ちていた。彼を包んでいた手の力が緩む。腕の力が、感覚が失われていく。そのままそれに身をゆだねれば楽だったかもしれない。

——でもこの手は、彼を包んでいる手だ。

痛む腕に全ての意識を集中させて、無理やり動かす。そのまま、離れかけた腕を再び彼の背へ。

絶対に離さない。ようやく、私にもこの時がやってきたのだから。

あの日、彼が私を救ってくれた、ヒーローであったように。

私も、彼を救うヒーローになってみせる。

「森藤……森藤……!!!」

彼の反応は依然変わらない。だが、そんなことももう関係なかった。

「大丈夫……もう、大丈夫だから——!!」

背中にかかった手を動かす。優しく、優しくなでつづける。安心させるように。昔、彼にしてもらったように。

「森藤。私のこと……わからないよね。うん。——じゃあさ、私が話してあげる」
言葉は、自然に零れた。

「小っちゃい頃とかさ、一緒に手を繋いで、公園とか遊びにいったじゃん？ 小学校で仲良くなつてからずっと。」

思い出が溢れる。もう、理性じゃ止められなかった。

「森藤つてさ、最初、みんなから顔怖いって言われて、なかなか友達できなかったじゃん？——でもね、私は、森藤と沢山話して、優しいとことか、沢山、沢山知れたんだよ？ ずっと一緒に居てくれた。それに、私が家族のことで悩んだときも、森藤にしか、打ち明けられなかったし……今森藤は、私のことが何も分からないかもしれないけど——でも、分からないなら、私が全部教えるよ」

目元が潤んでくる。声が震える。でも、泣けない。私は、私は——

「——だから、思い出してほしいの。．．．あの、爆発にまきこまれたときもさ、フードコート一緒に行こう、って話してたけど、結局行けなかったじゃん？だからさ、一緒に脱出して、フードコートとか、ゲーセンとか、行けなかったところ行こうよ。ねえ、森藤——」

嗚咽と、涙をこらえるので必死で。言葉が出てこなくて。ひたすら、背をなで続けた。

——永遠とも思えた時間の刹那。自分の肩の痛みが、ゆつくりとやわらいでいく。彼の力は緩み、その牙が離れる。獣のような身体は、段々と人の形を取り戻しつつあった。

「森．．．．．藤．．．．．？ねえ、私のことがわかる．．．．．？」

彼の顔をもう一度のぞきこむ。瞳に、恐怖と破壊の色は、もう、無かった。

彼の表情が緩み、口元が開く。

「——昔話とかよお．．．．．恥ずかしいんだよ」

少しだけ震えて、恥ずかしそうに目を逸らす。その表情はもう、蒼羽のよく知る森藤だった。

「森藤．．．．．！思い出したの．．．．．？蒼羽だよ？分かる？」

「分かるっつーの。恥ずかしい話をグダグダグダ——」

その言葉を聞いた途端、蒼羽の目から大粒の涙が零れた。先ほどまで気丈に彼に手を伸ばし続けた姿は少しなりを潜めて、少女らしい姿に戻っていた。

「森藤ー!!!!!!」

その様子に困ったように、森藤は声をかける。

「……………泣くなよ!」

「でも、私、全部わすれられたのかなって思っ——思い出したんだよね?」

「だから思い出したって」

「ありがとうー!!! うん、そうだね。ねえ森藤、大丈夫? ほら、ちよつとまだ怪我とか——」

キリがないので、森藤は蒼羽の言葉を無視しながら独りごつ。

「あー、まさかあんな胡散臭いメガネに騙されるとは……………ったく。俺としたことが」

ぼつが悪いように頭をかく森藤を、蒼羽がのぞきこむ。

「……………大丈夫。味方も沢山いるから、一緒に倒そう? それで、ここ出て、またシヨツピングモール、行こう?」

そんな様子を見て、森藤も笑みをこぼした。

「……………ああ、そうだな。まだ競馬のやつもやってねえし」
「け、競馬……………? う、うん。そうだね……………」

森藤は少し悪い顔をして、もう一度顔を引き締める。

「ああ。さっさとブツとぼして、行こうぜ、また」

「——うん。そうだね。一緒に戻ろう。日常に………うう、しんどう——
!!!!!!!」

泣きつく蒼羽と、あしらう森藤。彼女が取り戻した「日常」は、とても暖かく、優しくかった。

——だが、それを当然、快く思わない人間が居るのも、ここの空間だ。

「………くだらないですねえ」

当然、白衣を着た、パラケルススである。

「友情ってやつですか？そんなもん、犬にでも喰わせておけばいいんですよ」

パラケルススは、嫌味っぽく肩をすくめて、メガネをかけなおした。心底不快そう、と
いった様子だ。

「まあいいです。貴方達三人とも倒して——私には、彼さえ居ればいいのですから」
邪悪に顔を歪めるパラケルスス。だが、当然蒼羽も黙っちゃいない。

「——絶対にぶつとばすからな！」

横に並びたつ森藤も同様に、啖呵を切る。

「ああ、ぶつとばそうぜ」

並び立つ少年と少女。

燃え上がる朱と蒼は、ただただ激しく燃え盛る。元の日常へ帰るため。目の前の邪悪を打ち倒すため。

——そしてヒーローとして、自分を証明するために。

炎は、咆える。

「ボッコボコにしてやんよ」

!!!!!!!

シーン9-4 「certification of hero」

そびえ立つ、悪。対するは、燃え滾る純然たる意志の煌めき。

少年少女達は、己が欲する「日々」をつかみ取るため、その手を伸ばす。

「ガルルル……」

唸る白尾の獣は、ただ目の前の敵に対して殺意を向けている。

「フン、ガキが奪われたか……だが、ここでお前たちを倒してしまえばいいだけの話よ」
〈ディアボロス〉は嗤う。その侮蔑を帯びた眼光は、いまだ衰える気配はない。

「グアツ!!!」

コミヤ扮する獣が、口に加えた刀を振り下ろす。ひらりと身を躲す〈ディアボロス〉。
経験の差では、相手が一枚上だ。

「甘いんだよお!!」

異形と化した腕がコミヤに襲い掛かる。刀で受け止めるも、勢いで後ろに吹き飛ばされた。

瓦礫ともに転がるコミヤ。今までの戦闘でダメージもかなり受けている。こうなれ

ばもう、出し惜しみはなしだ。

瞬間、目に見えぬ速さで体制をととのえ、地を蹴る。あまりに急に身体を動かしたため、関節が変な方向にひん曲がったのがわかった。だが、そんなことは気にも留めない。全身の力を振り絞り、レネゲイドの力をフルに活かした一撃。回避は不可能。これなら、今度こそは——

「なっ……?!」

反応が遅れた〈ディアボロス〉は、手を翳すのが間に合わない。致命打だ。駆ける音速の一閃。——が、女神は微笑まなかった。

(っ……刃が……)

「残念だったなあ?!お嬢ちゃん?!」

(く……)

その一撃は、命を刈るまでには至らなかつたのだ。〈ディアボロス〉は、自身の片腕を引き換えに、体の中心部を守っていた。そして使ったのは片腕。つまり——

「これでジ・エンドだ!!」

血の弾丸が右手に収束する。先ほどと全く同じ攻撃。だが、刀が奪われ、隙を晒してしまったこの姿勢では——

「コミヤ!!!」

それら一連の動作を遮るように、響く声。対峙している相手のみに集中をしていた兩名は、そこで初めて気が付く。彼らの周りには、既に大量の「眼」が浮かんでいた。

「虎の子だ……喰らえ!!!」

シユンがそう叫んだ途端、世界が、凍る。

あまりにもあつけなく静止した全員の姿、一人その法則を破って動くのは、背丈に合わぬトレンチコートをきた少年のみ。非力なはずのその少年は、いともたやすくその「絶望的な状況」を打開する。

——世界に、色が戻る。

気が付いた時には、致命の一撃は無効化され、呆然とする二名のみ。

「んな……一体今、何が起きて……?!」

「ふっ……そんな口を叩いている余裕はあるのかな? 〈ディアボロス〉?」

「チィ……!」

背後から迫る、剣閃。間一髪、気が付いた悪魔、受ける。

状況は五分にもちなおった。彼らにできることは、これが限度。

後は託すだけだ。かの英雄となりうる少年と少女に。

(……さあ、頼んだよ。蒼葉、森藤くん)

戦闘は依然継続中。だが、その終止符も、きつとすぐ近く――



「小賢しい連中ですねえ……貴方達は!!」

へパラケルススへは吠える。まとった瘴気もさらに濃くなり、禍々しさもどんどん増していく。だが、もうそれも全て、二人にとつては――蒼羽と、森藤にとつては、ただ立ちはだかる壁にしか見えないだろう。

「あんたが今までやってくれたことの万分の一くらいはお返ししないとね!」

「だな。気色の悪い技ばっか使いやがって……ポツコボコにしてやるぜ」

「クツ……」

怯む白衣の悪。ここに今、雌雄が決する。

「行くよ森藤!!」

「ああ!!」

先行したのは森藤。先ほどまでの、殺意と本能をむき出しにした牙ではなく、明確な意思を宿した一撃。右腕に力を込め、獣のソレと成る。

(この力、確かに気持ちのいいもんじゃねえが……だが、アイツのためになるなら)

大蛇の如く、伸びる、腕。廃墟の柱ごと貫いて、へパラケルススの元へと向かっていく。

「二対一、分が悪いですが……貴重な被検体である君を、失うわけにもいかないのでね!!」

へパラケルススは、纏った瘴気で迫りくる牙を逸らそうとする。自分への視界を塞ぎ、少しでも回避の可能性がたまるように——だが、攻撃が襲い来る方向は自由自在。右から、左から、予測不可能な牙が襲う。

「見つけた……喰らいやがれ!!」

「……ッ!」

森藤が叫んだ途端、瘴気の霧が晴れた。そこには、鋭利な牙で肩を食い破られたへパラケルススの姿が。

「今だ蒼羽!!!」

「うん!!」

蒼羽は頷く。無二の存在である「彼」を横目に見ながら。

(これで最後……)

容量も分かってきた。その引き出し方も。そして、そのための条件も。今の私には、今の私なら——

「ハアアアアアアア！」

掌に意識を込める。固い覚悟と、絆によつてのみ成せる剣。それは絶対に折れず、煌々と燃える意思の炎を滾らせている。

足を踏み出す。一步、一步と倒すべき敵に向かつて。

「不味いですねえ……ですがこの距離、隙だらけです——なっ?!」

瞬間、少女は飛翔した。その先には、炎の回廊。朱と蒼の螺旋を描きながら舞う爆炎が向かう先は無論、へパラケルスス。

「……あんたが今までしたことの違い、アタシが受けさせてあげるから……覚悟しな!!」
「お、おのれええええええ!!」

へパラケルススは、必死に残った瘴気をかき集め、炎を迎え撃とうとする。しかしその全ては、炎の螺旋よつて掻き消されていく。

「なんなんですか?! なんなんですか貴方は?!」

恐怖に顔が歪むへパラケルスス。そしてそれに毅然と炎を翳す少女は——

「——私の名前は、蒼羽朱。ちよつとおせっかいな、森藤の唯一の幼馴染で、コミヤの友達で、シユン君の友達で、そして——」

蒼羽は流星の如く加速し、巨悪へと向かう。燃え盛るのは、炎光の尾。二色の混じつたそれはきつと、彼女の色であり、彼と彼女の色でもある。

「アタシたちの日常を守る、ひいろっだああああああああ!!!」

加速する意思。彼女のこれまでと、これからを乗せたその流星は、さらに勢いを増す。描く螺旋、燃え盛る炎。滾る流星は、全て目の前の宿敵へと――

「こ、この、小娘ごとき……がああああああ!!」

振りかざした炎は、勢いよくへパラケルススを吹き飛ばす。その廃墟を形作っていた数々の過去の遺物達を粉碎し、轟音を上げながら、白衣の悪は、建物の最端まで一瞬でたどり着いた。

視界が崩落した支柱達と煙で埋め尽くされる。誰もがその瞬間に注目した。

――数刻後。煙が晴れた先、そこには――

「ケホッ……ケホッ……! 私の……私の野望があ……」

瓦礫を押しよけ、立ち上がろうとする男。――トドメを、させなかった――? いや、違
う。

「で、どうだい?今の気持ちには」

蒼羽が、その前に立ちはだかる。倒れているへパラケルスすと、立っている蒼羽。勝
敗は自明だ。

「どうって……最低な気分ですよ……」

「ふん！ そうだよ。その最低な気分を、アタシたちは味あわされたんだ。だから——」
蒼羽は深呼吸をした。

「——だから、懲りたらもうやるんじゃない！ 分かったか？」

〈パラケルスス〉は少し拍子抜けしたような顔をしたが、結局すぐに、呪詛を吐き捨てた。
「最後まで、不愉快な小娘ですねえ……」

「アタシにとつちやあんたの方が不愉快だよ！」

蒼羽はうつづぶんを晴らすように転がる 〈パラケルスス〉の脇腹を足先でつついた。

「ですがねえ……」

「ん？」

「貴方なんかには捕まる私では、無いんですよ……」

突然、〈パラケルスス〉は上体を返した。気が付けば銃を口に咥えている。そしてそれを手に取った。狙いは当然、青羽の頭だ。

「ツ！ 不味い！ 蒼羽君!!」

誰よりも早くそのことを察知したシユンが叫んだ。

「……!」

蒼羽は自由になった 〈パラケルスス〉の腕を掴み、背中に回してキツく固める。手のひらから力が抜け、拳銃が床に転がった。そのまま拳銃を遠くの方へと蹴っ飛ばす。

「クツ……」

「させないよ！大人しく捕まっときな！」

「……最後まで本当に、不愉快な小娘ですなぁ」

「逆に私は超愉快だけだな！」

「……」

〈パラケルスス〉は今度こそ、本当に観念したように、うなだれた。

「よし！これで一件落着、かな？」

蒼羽は腰に手を当て、快活に笑った。——と、思ったら。

今度は別の場所で、うめき声。

「……？俺は、負けた……のか……？」

「そうだよ！まけたんだよ!!」

うめいたのは〈ディアボロス〉。そしてそれに真つ先に反応したのはまさかの遠くにいる蒼羽だった。大分機嫌がいいようで、さんざん煽り倒している。

「グウ……こんな小娘と、ガキゴごゴとききに、この俺が——」

「ガキゴつて言うんじやねえええええええ!!!」

今度は真逆の方向から〈ディアボロス〉を鉄拳が襲った。声の主は、もちろんシユン。ドゴゴつと鈍い音がすると、〈ディアボロス〉は後ずさり、よろめいた。

「クツ……なるほど……こうなっちまったら……」

「？」

「こうなっちまったら……」

「どうするんだよ？」

「こうなっちまったら——」

〈ディアボロス〉は両足に全力を込めた。

「にーげるんだよおおおおおおおおお!!!」

そう言うと、先ほどまでボロボロだったとは思えないほどの俊敏さで駆けだす。

誰かが追おうと気が付いた時には、〈ディアボロス〉の姿は跡形も無かった。

「ハア……また逃げられたか」

いつの間にか獣化を解いていたコミヤがため息をついた。

「だな。まあ、〈ディアボロス〉だし、仕方がない」

シユンも肩をすくめた。〈ディアボロス〉の通り名として、不死身、というものがある。それはこの逃げ足の速さにも由来したものであるのだが——ここでは、解説を省こう。

そんな様子を見て、輪の中に入りそびれている少年がいた。

「あー、その、えっと……」

「ん？森藤？なんなのそのよそよそしい態度は！ほらこつちきてホラホラ!!」

「いやあ……」

何かを言いよどむ森藤に、声をかけるのは蒼羽。見かねたコミヤも口を出した。

「あー、気にしてないでお前もとりあえず来い」

「その……」

「？森藤！こつちおいで!!」

よくわからないうつた様子で声をかける二人。

「——言いてえことが、あるんだよ」

「？」

「あの……悪かったな」

その言葉を聞いた途端、目の色を変えて蒼羽が森藤の元へ駆け寄った。

「いやあ、なんかさ。化け物だのなんだの、ひでえこと、言っちゃっただろ？」

申し訳なきさそうに森藤は目を伏せる。意識を半分以上洗脳されていたとはいえ、自分のしたことだ。罪悪感も大きいのだろう。

そしてその言葉を聞いても、青羽は変わらず笑みを浮かべたままだ。

「森藤……大丈夫だよ！こつちやって正気にも戻ったんだし!!」

「……」

森藤は、青羽の言葉を聞いて、少しでも安心したように。顔をそむけた。

「お？お？森藤？」

「……なんだよ」

「いや、黙ってたから……あ、もしかして反省してるの？珍しいねえ！あんまり反省しないあんたが!!反省を?!!」

蒼羽は先ほどとは少し変わったいたずらっぽい笑みを浮かべて、森藤に迫った。

「ぬ……く……だあー！もういい！もういい!!」

「あれー？怒っちゃったかな？森藤？」

今度は脇腹までつつつき始めた。こうなつた蒼羽は、なかなか止まらない。森藤は観念したように口を開く。

「ほらー！行くんだろ?!競馬のゲームしに!!」

「……ああーうん。シヨツピングモールね!!競馬はよくわかんないけど……」

約束を思い出した蒼羽は嬉しそうに跳ねた。そして視界を巡らせた先には、つい最近できた「友達」の姿。

「あーコミヤとシユンも一緒に行くー？」

「行くわけないだろ!!」

「えー」

反射的にコミヤが叫ぶ。とんでもないといった様子で、顔を真っ赤にしている。

だが、その背後では、指を顎に当て、思案をしている様子のシュンの姿が。

「うーん。よし。支部長命令だ。行こう！」

「……ハア?! だから、私は行かないと——」

不服そうなコミヤだったが、シュンはそんなこと意に介していない様子。

「はーい命令なのでダメですー」

森藤ははにかんだ。

「よし、メダル代は俺持ちでいいよ」

シュンが目を輝かせる。

「お、太っ腹じゃーん」

「色々迷惑かけたからな」

「やったねー! あ、じゃあ森藤、フードコートのおつきいステーキもちよつとお願いしま
すよ森藤さーん?」

蒼羽がここぞとばかりにたたみかけた。だが、流石の森藤もそれには乗らなかつたよ
うで、

「あんま調子に乗んなよ……?」

だが、蒼羽は食い下がる。

「いやーだってアタシここ噛まれたし？痛いよー！」

「しょうがねえなあ……！」

前言撤回。森藤はチヨロかった。

「んふふー。そういう甘いところも大好きだぞ。ありがとうな!!!」

——全ての交渉を終えた蒼羽は満足気にニヤニヤしていた。

「……なあパラケルスス、いたたまれない気持ちになるよな」

いつの間に隅っこに移動していたコミヤがげんなりしている。

「本当ですよねえ……」

「少しだけこの状況下にいるお前のことを同情したいと思った」

「……じゃあ逃がしてくださいよ」

「——それはできんな」

「ちよつとおー……う」

!!!!!!!